
この転生はないだろ…。～幻想郷の絶対強者となるまで～リペア

フランとレミリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この転生はないだろ……。〜幻想郷の絶対強者となるまで〜リペア

【Nコード】

N2688V

【作者名】

フランとレミリア

【あらすじ】

今俺死にました。

えと……………転生するらしいです。

そして神によって与えられた（強制的に）能力……………あんまし使いたくないなあ……………

そんな感じで第二の人生始まります。

………って！？なんでこうなったんだ！？

この作品はこの転生はないだろ……。幻想郷の絶対強者となるまで
のリメイク版です（＾o＾）ノ

作者は執筆能力が底辺なので やノノなどの表現を使ってしまう
ます。

なのでそのような表現が嫌であればブラウザバックを推奨します…
………というか実力無いからどうしたって無理難題なんですよ…

……orz

第1話

いきなりだが俺は死んだ。

原因は木から落ちそうになっていた5歳くらいの少女を助けようとして木に登り、助けたはいいが降りる際に頭から落ちてしまったからだ。

4

……………ツイてね俺

ん？

なんでそんな事が分かるのかって？

それは……………

「わしが直接頭に情報を叩き込んだがからじゃの」

真っ白な何も無い広すぎる空間でそう言って無い胸を張る銀髪碧眼の……………幼女

「……………チエンジお願いします」

俺は幼女を見た瞬間にそう言う。

「な、何故じゃ！？こんな可愛いおなごに何故そんな事を言うのじゃ！？」

すると幼女は慌てたようにそう俺に聞いてきたのだが……………


~~~~~

「……つまり俺が死んだのは完全なイレギュラーって事なのか？」

「まあ言いにくい事じゃがそう言う事じゃ」

あれから誰もここには来なかった為、俺は仕方なくいまだに立ち直れていない幼女に話を聞くと幼女はそう言って頷く。

まあ要するに本来ならあの少女を助けて死ぬのは俺じゃなくて偶然そこにいた70歳代のじいさんであり、俺が介入する事は無かったらしい。

……じいさんの身代わり……

説明を受けた後にそんな考えが頭を過ぎる。

まあ起きた事は仕方がないか……

そう思い完全に吹っ切れた訳ではなかったが俺は幼女に

「……………さっさと俺を天国か地獄に送ってくれ」

笑顔でそう言った。

「な、なんと！お主それで本当によいのか!？」

すると幼女は驚いたような表情を浮かべてそう言う。

それに対して俺は

「ああ、別にあんたが原因を作った訳じゃないし、今回の件に関しては誰も悪くない。俺が勝手に死んだだけの事だから……………だから、あんたも俺の事は気にしないでくれよ……………な？」

俺は幼女に笑顔のままそう言った。

誰も悪くない……………

なら俺はこのまま輪廻というものに再び交わるか天国と地獄のどちらか相応しい方に行くのがいいのではないのか？そう思っただけの言葉だったのだが……………

「……………ひっく……………グスッ」

幼女がいきなり泣き出した。

何故？

「ど、どうしたんだよ！？なんで泣いてるんだ！？」

俺は泣き続ける幼女にどうしたらいいのか分からずオロオロしていること

「……………決めた！こんなにもいい人間であるお主をこのまま死なせる訳にはいかん！！」



「……………確かにそうじゃのう……………ならば……………」

別世界に転生させればいいのじゃ!」

笑顔でさらなる爆弾発言をしてくれた。

「ちょ!?! 転生!?! そんな軽いノリでやっていいものなのか?」

俺は笑顔の幼女にそう問い掛けると幼女は

「生き返らせるよりはマシじゃろう?」

と首を傾げてそう答える。

……………不安だ……………果てしなく頼りない……………





~~~~~

「その後の幼女」

「……………さて……………行ったの……………ふむ、やはり普通に転生させるのはつまらんから……………身体能力限界突破の才能とか魔力や霊力なんかの方も才能を追加して……………む？なんじゃこりゃ？”げえむ”？……………この”きゃらくたあ”じゃったかの？これも追加すれば……………おう？なんじゃ、奴の記憶が所々抜けておる……………大丈夫かのう……………」

無事？転生させた幼女は主人公の能力を追加（魔改造）しようとしていたが記憶が所々抜けているのを見て、冷や汗をかいていたらしい

第1話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第2話（前書き）

やっとできました。

それで第2話始まります。

第2話

いきなりですが今俺……………いや”僕”は空を見上げています。

雲一つ無い晴れ渡った空の下で”僕”は空を見上げる。

「……………この転生はないよ……………」

あまりに空が青いので思わずそう呟く。

しかしその声は聞き慣れた自分の声ではなく、華奢で高音質なソプラノボイス。

そして手に触れるのは腰まである流れるように綺麗な黒い髪。

そう……………

”僕”は……………

「……………どうなさったのですかお姉様？」

そこまで考えていたら不意に声をかけられた。

振り返る銀色の髪に着物を着た美少女が心配そうに”僕”を見ている。

そんな少女に”僕”は笑顔で

「……………大丈夫だよ

”永琳”」

そう言ったのだった。

~~~~~

目が覚めると高い天井が見える。

周りを見ると裕福な家なのだろう、しっかりとした木造の広い部屋に寝かされている事き気が付いた。

そして起きようとするが体はうまく動かない。

そんな自分の体を不審に思った俺は声を出して人を呼ぼうと口を開こうとした時……………

バタンッ！

「生まれたのか！？」

そんな焦ったような大声を出して勢いよく引き戸の扉を開いて現れたのは黒髪で高身長イケメン。

たぶん町を歩いていたら10人中8人は振り返るレベルのイケメンだ。

「そんなに大声を出すと泣いてしまいますよ？」

そんなイケメンを注意するのはこれまた銀髪の美人……………ていうか身長がかなり低いのにわがままボディの口リ巨乳。

注意されたイケメンは少し詰まったような表情を浮かべたが、俺を見つけると嬉しそうな笑顔で近寄り抱き上げた。

………って!?

俺この二人の子供なのか!?

………父親がロリコン………

地味に凹むなこれ………

そんな事を思っている俺を嬉しそうに抱き抱えるイケメンは

「この子の名前は”永伽”（えいか）………八意 永伽だ!」

そう言って俺を力強く抱きしめたのだった。

………永伽か………なんだか女の子みたいな名前だが親からもらった名前に文句を付ける気はない………

まあここに生まれてしまったからには仕方がないか………

これからよろしく願います父さん、母さん。

俺は今できる最高の笑顔を新たな両親に向ける。

すゝむ……………

「まあ 可愛い笑顔 この子は必ずこの世界一可愛い女の子に育つ  
わ」

母さんが俺を見ながらそう言って俺の頬を撫でた。

……………はい？俺……………女？

さらっと衝撃的事実を知りました。

それからというものの赤ちゃんの時期はなんかの罰ゲームかと思えるような事（授乳にオムツ交換）の連続だったのだが、平凡な毎日を過ごす事ができた。

しかし2歳を過ぎた頃に……………

「永伽ちゃん……………ん？その男口調はダメって母様言ったわよねえ？」

そう言つて怖い笑顔で俺を追い詰める母さ……………母様。

「あう……………ごめん……………じゃなかったごめんなさい！！！」

俺は謝るがこれで注意されたのは今日だけで15回目だ。

「……………永伽ちゃんはその口調を直さないなら母様にも考えがあるわ……………」



事。

「流石私と彼の子供だわ …………… さあ永伽ちゃん？ 始めからお話  
してみましようか？」

母様はまたあの怖い笑顔でそう言ってきた。

だから……………

「は、はい母様…………… ぼ、”僕”の名前は八意 永伽です / / /  
/ /」

俺…………… いや”僕”はこうして口調を完全に直す（調教）事となっ  
たのだった。

そんな”僕”を見ながら母様は再び大きくなり始めたお腹を撫でる。

そう……………

これからまた新たな家族が生まれるのだ。

父様からは

「名家である八意家に相應しい姉になりなさい」

と言われている。

僕は笑顔でその言葉に頷き……………

新たな家族の誕生を待った。



「やごころ えいりんでしゅ！」

この新たな家族である永琳の言葉を聞いた僕は驚きを隠せなかった。

何故ならこの時永琳は生後6ヶ月なのだ。

驚かない方がどうかしてる。

しかし驚きを隠せない僕とは対象的に両親はというと……………

「すごいわ永琳」

「流石八意家の娘だ！」

なんて喜んでいた。

両親はある意味大物なのかもしれない……………

そう思い呆れる僕を置いて両親は永琳を抱き上げる。

永琳もそれが嬉しいのか凄くいい笑顔だ。

しかし

そんな微笑ましい日常はこの日を境に終わりを告げた。

それは何故かというと……………

永琳が希代の大天才だったからだ。

そしてその天才である永琳がやった事……………

それは

現在の生活水準を一気に引き上げる事に成功したというものである。

これは本当にすごい事である。

どれくらいすごい事なのか具体的に説明してみると………今まで江戸時代初期くらいの生活を営んでいた僕達の生活水準を一気に平成時代くらいまで引き上げるなんてとんでもない事を永琳はたった10年で成功させたのだ。

しかもその為に発明した物も数多くあり、町で永琳は神童扱いされた。

さらにその子供が名家である八意家の子供である事も重なって八意家の政界や財界での発言権はかなり高まる事となる。

その間の僕はというと………天才過ぎる妹に少しでも追い付こうと多くを学び、強くなるうと武道を習い………極める事に成功。

………というか気が付いたら教えてもらっていた師範や達人級の人達ですら敵わなくなっていた。

なんだろう？

まあそのおかげかは知らないけれど近所では”武の永伽”と”知の

永琳”……………” 八意家自慢の高嶺の双花”と言われてたんだよね……

そして今に至る。

~~~~~

「永伽お姉様、美味しいお茶が入りましたよ？」

永琳はそう言っ僕にお茶を渡してくれた。

今僕と永琳は広くなった家の庭でお茶を楽しんでいる。

「ありがとう永琳 ……………んっ…美味しい……………」

僕は永琳から受け取ったお茶を受け取り口に含むとお茶独特の美味

しさが口いっぱいに広がりつい笑みがこぼれた。

「まあ永伽お姉様　そう言って頂けるだけで私は幸せですよ」

永琳はそんな僕の顔を見て微笑んでいる。

はたから見れば微笑ましい光景なんだけど……………

「え、永琳……………鼻から血が垂れてテーブルが大変な事に……………」

僕の指摘に永琳はハツとした顔となり慌てて血を拭う。

永琳はいつの頃からか両親よりも僕に懐くようになっていたのだけ
ど……………

なんか最近の永琳はこんな風に鼻から血を流す事が多いんだよ……………

それに今年で僕は16歳、永琳は14歳になるのにいまだに一緒の
布団で寝起きするし、その時の永琳の息が荒くなって目が怖い。

それに母様の遺伝なのか僕は背が14歳である永琳より低いのだが、
その代わりに大きく育った胸をよくお風呂とか寝てる時に揉まれる。

しかも的確に弱い所を重点的に。

周りの人からは

『妹は姉にゾッコンだな』

とか

『男が入る隙間がないな』

とか

『いつそ姉妹丼が……………』

最後のはちょっとおかしいけどだいたい同じような事を言っている。

どういう事なんだろう？

「……………失礼しましたお姉様。これで大丈夫ですか？」

そんな事を考えていると永琳は僕に拭き残した血が残っていないか聞いてきた。

「……………うん 残ってないよ？」

そう言っつて僕は永琳の顔に血が残ってないか確認して笑顔で頷くと

「……………ブハッ!!」

永琳はさらに血を噴出した。

「永琳!？」

しかも明らかに失血死できるような量を噴き出したのだ。

そのまま倒れる永琳を抱き抱えた（お姫様抱っこ）僕は急いで母屋に向かう。

その間永琳の鼻からの出血はさらにひどくなりさらに僕は焦った。

「我が人生に……………一片の……………悔い……………無し……………」

不意にお姫様抱っこされた状態の永琳はそんな事を笑顔で呟いて意識を失う。

第2話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第3話（前書き）

できました

それでは第3話が始まります。

第3話

いきなりですが僕は驚いています。

「……………ここどこ？確か僕は永琳と寝てたはずんだけど……………」

今僕はどこか見覚えのある真っ白な広い空間にいます。

「なんだか見覚えがあるような……………ん？あれは……………」

周りの様子を伺っているといきなり古い大きな木製の扉が……………

「スルーしよ」

僕はその扉に背を向けてその場から立ち去る事にした。

あれから立ち去ろうとしてもどこにもいけないので仕方なく喚き散らす幼女の話を書く事にしたのだが……………

「本当に？本当に聞いてくれるかの？」

幼女はその目に涙を溜めた状態で僕にそう聞いてくる。

……………ちよつと罪悪感が……………

実際のところ前にやられた時の意趣返しのもりでやったんだけどやり過ぎだったかな……………

今の涙目の幼女にはそう思わせる物がある。

だから

「うん、聞かせて？」

僕は笑顔で幼女にそう言ったのだったけど……………

これが本当の意味で僕の物語の始まりになるなんてこの時の僕には想像も出来なかった。

だって……

「なら話させてもらっつぞ？今回お主を呼んだのはな……

お主に能力を授ける為なんじゃよ」

「……え？」

こんな事言われるなんて誰も思いもしないよね……

第3話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第4話（前書き）

完成しました（＾Ｏ＾）／

それでは第4話始まります。

第4話

いきなりですが今僕は驚きを隠せません。

「ちょ………ちょっと待って！！能力を授ける？！いったいなんの為に能力を？」

僕はそう言いながら幼女に詰め寄った。

そんなものは僕には必要ない。

今の生活に満足している僕にとってそれは到底必要とは思えるようなものではなかったのだ。

しかし幼女はあのふざけた雰囲気を一瞬で霧散させると

「……………受け取らねば死ぬぞ？しかもお主だけでなく、お主の大切な”モノ”がすべてを失う事になるやもしれん」

無表情でそう言った。

「ッ！？……………それは……………どういう意味なの？」

明らかに違う幼女の雰囲気にもどろろにかそう聞き返す僕に幼女は目を閉じ

「……………もうじきお主にとって生き方を変えるような出来事が起きる……………しかもその時お主は戦わねばならんのじゃ……………その来るべき時の為にお主に能力を与えるのじゃよ」

不安げな僕を諭すようにそう答える。

「…………………………そんな……………」

正直僕にはその話が信じられなかった。

しかし幼女はそんな僕の様子を気にした様子もなく僕を見つめて話を続ける。

「すでにお主にはその一端である才能が開花し始めておる…………………………身に覚えてはないかの？気が付いたら自身の力があがっておったり

しておるはずじゃ」

「ッ！？どござして……………」

僕は幼女の言っている事に驚愕した。

何故なら今の僕の状態を正しく言い当てているのだから……………

「今回は今日覚め始めている力に加えて新たにお主の中でまだ眠っておる能力……………」存在を司る程度の能力”を目覚めさせる為にここに呼んだんじゃよ」

幼女はそこまで言うと笑顔で僕を見上げる。

その笑顔に僕は少しずつ平常心を取り戻し……………

「……………本当にその力が今後必要になるの？」

幼女にそう聞いた。

すると幼女は何も言わずに笑顔で頷く。

僕はしばらく俯き考える……………

そんな力が必要になるほどの戦い……………

そんな事態になった時に果たして僕は今のままで大切な家族である
永琳や両親を守りきれえるのか？

「……………無理だ」

僕は今のままで大切な家族を守りきれえるような自信は無い。

ならばその力を目覚めさせてさらに強くなる必要がある。

すべては……………僕の大切なモノを守る為に……………

すべてを守りきるなんて事は僕には出来ない。

でも……………自分の周りだけでも守りたい！

そんな答えにたどり着いた僕が顔をあげると

「決心がついたようじゃな……………答えを聞こう」

幼女はさっきと同じような雰囲気を身に纏い僕にそう聞いてくる。

僕は一度だけ大きく真剣な表情を浮かべたまま深呼吸して

「僕に力の使い方を教えてください！！」

そう言ったのだった。

「……………という訳でお主はすでに能力を使える状態だったのじゃよ」

あの僕の答えを聞き届けた少女は詳しく僕の中に眠っていた能力について説明してくれた。

少女の説明によると僕の能力……………”存在を司る程度の能力”はまさにチートという言葉に相応しい能力なのだという。

簡単に説明すると……………

例えば目の前に大きな岩が”存在した”とする。

僕的能力を使えばその大きな岩の”存在”をこの世界から消したりする事ができるのだ。

もっと大きな話にすれば何も無い空間に僕がそこに炎が”存在する”と能力を使って僕が肯定すれば何も無いその空間に炎が存在し続ける事になる。

これがどれほどすごい事なのか気が付いた僕は逆にこの力に恐怖した。

強すぎる力は新たな争いを生むきっかけになってしまう可能性があるからだ。

しかし恐れるだけでは自分の大切なモノは守る事は出来ない。

確かに力は使い方しだいでは破滅にも導く事ができる。

しかし僕にはそんな事を望むような理由は無いし、もしそんな間違いを犯しそうになれば両親や永琳を泣かせる事になってしまうので、僕は力を放棄しようとするだろう。

だから今の僕は力を求める事にしたのだ。

それが例え地べたを這い纏わり、汚泥を啜るような生き恥を晒すような行為なのだとしても！！

「想像するのじゃ！！お主が必要だと思う力の”存在”を！！」

不意に幼女がそう言った。

僕はその”存在”を想像する。

僕に今本当に必要な力を！！

「……………来て！」正宗”！！！”

そう叫んで掲げた左手に緑色の閃光が細長く伸びて質量を感じさせる一振りのもとも長い太刀となる。

ヒュン！

僕は勢いよく正宗を振り降ろして構えた。

「はああああああああああああ！！！」

そのまま僕は無心で正宗を振り続ける。

それはまるで……………元々この正宗の使い手であったのかのような感覚だった。

「八刀……………一閃”！！！”

ズバンツ！

使った事の無い技の使い方が頭の中に入ってくる。

しかもその技の一つ一つがとても懐かしく感じるのだ。

突然の事に反応出来ずに僕は落ちてしまう。

その時に

「坊やだからさ……………」

そんな言葉が聞こえたような気がした。

~~~~~

「行ったようじゃな……………頑張るんじゃぞ永伽？」

幼女は永伽が落ちていった穴を見つめ微笑みながらそう呟く。

「……………ずいぶん入れ込んでいるようですね……………」元最高神”？」

不意に何も無い場所から薄笑いを浮かべる男が現れた。

「なんの用じゃ下級神」

幼女……………元最高神は永伽に向けていた温かな視線ではなく、見つめられるものを凍りつかせるような冷たい目で男……………下級神を見つめる。

「くっ……………地に堕ちた最高神め……………」

その視線に耐え切れなかったのかそう吐き捨てるように言っ下級神は姿を消した。

「……………つまらん奴じゃのう……………」

残された元最高神はそう呟いて再び永伽の落ちた穴を見つめ続ける。

「……………頑張るのじゃぞ？」

元最高神が穴を見つめながらそう呟いた言葉はどこか優しい響きを  
感じさせるものだった。

## 第4話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

## 第5話（前書き）

できた（「。。」）

それでは第5話始まります。

## 第5話

いきなりですがかなり寝不足です。

「……………ボー……………ZZZZZ」

眠くて頭がボーっとする……………

「永伽お姉様！寝てはいけませんよ！！」

「ハッ！？ね。寝てないよ永琳！」

僕はそんな永琳の声に覚醒してそう言うと永琳は苦笑しながら

「お姉様？口からヨダレを垂らしながら言われても説得力ないです

よ?」

そう言っつて僕を見ていた。

「あ〜う〜……………恥ずかしいよお／／／／／」

僕はあまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら口元をハンカチで拭く。

何故こんな事になっているのかというと……………あの幼女との対話の後目が覚めたら真夜中だったからなのである。

しかも目が冴えてしまっつて眠れない……………

「……………なんでこんな時間に戻したのさ……………」

思わずそう呟いた僕は悪くないと思っつ。

そしてそのまま朝を迎えてしまっつた為現在のよつような状態に陥っつているのだ。

しかもこれから永琳の講演会があるので出掛けなくてはならないし、大切な妹である永琳の講演会の間寝ているのは流石にどうかと思っつ。

「うっ……………なんでこんな時に……………」

眠い目を擦りながら僕はその会場へと移動する車に乗り込む。

父様と母様はすでに会場入りしているらしい。

「うにゅ?.....あふぁ.....こゝこれは反則過ぎるよぉ.....」

車の座席に座ってみると予想外な事にふわふわしてて柔らかいし暖かい.....

「お姉様!?! 眠るまでが早過ぎですよ!?!」

「わひゃあ!?!.....え、永琳.....寝てない.....ZZZZZ  
Z」

そんな永琳の声が聞こえて起きたはずなのにまた瞼が下がって.....

.....

「起きてくださいお姉様!?!お姉様!?!」

ごめん永琳.....僕はもうダメみたいだ.....

疲れたよパトラッシュ……………もうゴールしてもいいよね？

その思考を最後に僕の意識は途切れてしまったのでした……………  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z

~~~~~

「……………んう……………あ……………れ？僕寝ちゃったんだ……………
……………」

目が覚めるといつも永琳と一緒に寝ている部屋で布団に寝かされて

いるのに気が付く……………

誰かが運んでくれたみたいだ。

「なんか忘れてるような……………あ！？永琳の講演会！！」

僕は何か大事なことを忘れているような気がして考えていたら不意に今日が永琳の講演会である事に気が付いた。

「急いで行かないと！！」

僕は布団から起き上がろうとして……………

ギシッ！

出来なかった。

「ふえ！？なんで僕縛られてるの！？」

僕は自分の体が縄で縛られている事（亀甲縛りで）に気がついてそ

う叫んだ。

ついでに言わせてもらえば布団の下にはなにも着ていない。

混乱する僕はなんとか縄抜けして脱出しようとしていたら……

「……………お姉様が悪いのです……………」

そう呟き部屋の暗がりからゆっくりと現れるのは……………ボンテ
ージに身を包んだ永琳

「え、永…琳？」

僕はそんな永琳の姿を見て嫌な予感がした。

どう考えても今の永琳の様子がおかしい。

しかも永琳の声を聞いているとなんだか体が震えてくる。

なんで？

ピシンッ！

「ひゃう！？」

突然鳴り響いたそんな音に思わず悲鳴が僕の口から漏れる。

「……………お姉様がいけないのです……………だって……………だってあんなに可愛い寝顔を私に見せてくださったのですから！！」

鞭を握り絞めた手をダランと下げながら永琳が鼻出血ですごい事になっっている顔を僕に見せた。

しかもすごくいい笑顔だ。

「あ……………ああ……………」

僕はなんだか訳の分からない恐怖を感じて目を見開きゆっくりと近いてくる笑顔で永琳を見つめる。

「……………いい表情ですお姉様……………さあ……………その可愛い声で鳴いてくださいね」

永琳はそう言って笑顔のまま僕の寝ている布団を剥ぎ取って……………

……………

ここから先は永伽の名誉の為に削除

（4時間後）

「グスツ……………ひっく……………僕もっお嫁にいけないよ……………」

僕は疲れきって動かない体を引きずるようにして動かして布団を体に巻き付ける。

しかしその様子を満足そうに見つめていた妙にツヤツヤした肌をしている永琳は

「大丈夫ですよお姉様 私がお嫁にもらいますから」

笑顔でそう言うのだった。

第5話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第6話（前書き）

できました（二回目）

鬱展開です。

それでは第6話始まります。

第6話

いきなりですが今僕は冷たい雨に打たれています。

あれから4年の年月が過ぎた。

「……………永伽様！全ての配置が完了しました！」

そう僕に向かつて報告するのは全身を映画などでよく見るような特殊部隊の格好で身を固める一人の若い男。

その声に顔をあげると目の前には豪華な高級ホテルが見える。

そして、若い男からの言葉を聞いた僕は無表情のまま頷いて周りに控えている隊員達の前に出るとおもむろに自分の利き手である左手を前に伸ばして……………

「……………突入開始……………誰一人この場から生かして帰してはならない……………それが例え……………」

幼い子供だったとしても……………」

そう……………命令を下した。

「突入開始！！幼子であろうとも誰一人生かして帰すな！！」

命令を聞いた先程の若い男……………この部隊の副隊長は鋭い声で自身の持っている無線で僕の命令を別の場所で待機していた隊員にも伝える。

ダダダッ！ダダダダダダダダダダッ！

程なくして、そんな銃声がホテルのあちこちから聞こえてきた。

それに伴いホテルの中で逃げ惑う人達の声も聞こえる。

しかしその声に僕が何かを感じる事もなく、ただただその光景を視界に映すだけ。

『ピー！ザザッ！……………こちら乙部隊！ホテル地下にて何やら巨大な生物を確認！至急支援を……………気付かれた！？下がれ下がれ！撤退……………ザザッ！』

突入開始から10分を過ぎた頃、不意にそんな通信が入ってきた。

「……………正宗」

僕は左手に正宗を呼び出すといまだに悲鳴があがり続けるホテルに向かって歩き始める。

身に纏う服はセフィオスのようなコートに黒いワンピース。

”あの時”から変わってしまった僕にはどこかとても似合っているらしい。

「……………くだらない……………」

僕はそんな感傷めいた考えを切り捨てて凍りついてしまった冷たい心呼び起こす。

その途中で

「永伽様！御身自らご出陣なされるのですか？」

後ろから副隊長からその声をかけられたので僕は……………

「全隊員を退避させて……………巻き込んだじゃうから……………その後は命令あるまで待機」

そう言ってそのままホテルの中に入って行った。

「承知！御武運を！」

副隊長はそう言つと僕に向かって敬礼してくれているが僕は無視する。

正面口を入ってすぐに綺麗な大理石で作られたエントランスホールが見えた。

しかしそこには血と硝煙の臭いが立ち込め、床や壁には大量の血が飛び散り、その他にも弾丸が撃ち抜かれた哀れな骸も散乱している。

僕はそれらに興味を持つこともなくただ歩みを進めた。

ガシッ

「……………た、助けて……………」

不意に右足を捕まれて僕の歩みが妨げられる。

足元を見ると体から血を噴き出して今にも死にそうなの10歳くらいの男の子が俯せの状態僕の手を掴んでいた。

その目には僕に救いを求めているのが分かる。

僕はその男の子を見つめて……………

「……………」ごめんね

ザシュッ！

正宗でその首を撥ねた。

その事に対して心がズキリと痛んだが無視する。

また心が擦り減ったような気がした。

「……………」

僕はそのまま前を向いて最後に通信のあったホテルの地下へと向かう為エレベーターの方に足を進める。

チーン！

僕はそれを確認して……………

ズバツ！

すれ違い様に先頭にいた三体を横一文字に斬り払った。

「『『『ガウ！？』』』」

生き残ったガードハウンド達は驚いて距離を離そうとしていたけど……………

「……………そのまま……………」

”一閃”

ズバンッ！

「「「「「！……！……！……！……」」」」」

その瞬間ガードハウンド達は驚いた事だろう。

何故なら………彼らの視界は斜めに写り、その体をバラバラに斬り裂かれていたからだ。

”一閃”………これはKH？におけるセフィオスの剣技の一つだ。

相手に接近しながら一瞬にして13連撃の斬撃を行い、そのまますり抜けていく技である。

なので………

チーン！

僕はそのままエレベーターに乗り、最下層に行く為ボタンを操作して閉めた。

僕は一度だけ視界に納めて……………

「……………ごめんなさい」

そう呟く。

その時に

「なんでこんな事になったんだろう……………」

そんな呟きが無意識に漏れ、僕は3年前に起きた”あの事件”の事を……………

あの幼女が言っていた”僕の生き方を変えてしまった事件”を思い出していた。

しかしその言葉に反応して一滴の涙が頬を伝った事に僕は気がつく事はなく、後に残ったのは悲劇の現場となったエントランスホールに残されたのは物言わぬ哀れな骸と血飛沫のみだけだった。

~~~~~

（最下層）

そこには壁いっぱいモニターがあった……………

そのモニターのいくつかにエレベーターに乗る永伽の姿が見える。

「……………くそっ！ 忌ま忌ましい”八意の猟犬”め……………」  
「何を嗅ぎ付けるとは……………」

そう呟くのは皮張りの黒い椅子に座る明らかに過剰に蓄えがある肥満体型の初老を迎えた男

「防げるのか？あの八意の雌犬を……………」

その隣でそう話かけるのはやはり同じような男なのだが……………

「……………」

その場に沈黙が流れる。

彼らの命運が尽きるのはもつすぐその事のように……………

## 第6話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

## 第7話（前書き）

できたあ！

それでは第7話始まります。

## 第7話

いきなりですが僕は今昔の事を思い出しています。

〈3年前〉

それはある雨の日の事だった。

その日は僕が懇意にしている道場の試合がある為、永琳は新たに発見した研究理論の発表がある為に家を半日ほど留守にして出かける日だったのだけど……………



目の前に映るのは性的に暴行を受けながらも僕と永琳に逃げるように指示する母様。

そしてその周りにいるのは母様に暴行を加えながら僕達を粘っこい視線を向けていた男達。

水っぱい音が家に響き渡る。

その音源となっているのは当然母様。

ギシッ

心の奥でそんな音が聞こえる……………

その母様は苦痛の表情を浮かべながらある一点を見つめていた。

その視線の先にはボロ雑巾のように打ち捨てられた肉塊がある。

その肉塊にはいくつもの刃物で斬られたような傷が見え、切り裂かれた腹部からは生々しい臓器が飛び出していた。

しかも腕や足にあたる部分が何か重い鈍器で殴り潰されてしまい、おかしい方向に曲がっていたりしている。



また心の奥で音が聞こえた

胸の奥が寒い……………

そんな僕達に母様を暴行していた男達とは別の男達が近づく。

そんな時だった。

「永伽！！永琳！！八意の血を絶やしてはなりません！！絶対に！！」

暴行を受け続ける母様はどこか覚悟を決めたような表情を浮かべて  
そう言つと……………

「ぐっ……………カハッ」

「あっ！コイツ！？舌を噛み切りやがった！！」

母様は血を吐き出し事切れた。

「……………え……………ああ……………う、嘘……………嘘ですよねお姉様……………  
……………お母様が……………お母様が……………」

僕の後ろで永琳のそんな声が聞こえる。

ピシッ！

……………何かにビビが入ったような音が聞こえた。

.....寒い.....胸が寒くて寒くて堪らない.....

なんだか心が凍りついたみたいだ。

そして

.....僕はいまだに下品な笑い声をあげながら近づいて来る男達に.....

「.....” 八刀一閃”」

ズバンッ!!

正宗を呼び出して切り払った。

「……………なっ!?!?」「……………」

「永伽お姉様!?!?」

それは動かなくなった母様の体をいまだに弄び続ける男達と僕の後ろに隠れる永琳からの驚きの声。

僕はその声を無視して歩き始める。

返り血を受けたままの格好で歩き続けた。

男達は母様を投げ捨てると、その手には父様を斬りつけたであろう刃物や腕や足を叩き潰したと思われる工事よ用のハンマーを握り絞めていた。

ピシピシッ!

さらに何かにヒビが入る。

……………寒い……………胸の奥が寒いよ……………

そう思いながら僕は正宗を構えた。

それを見た男達は手にした武器を構えて突撃をかけてくる。

それを僕は……………

「……………そのまま……………」

”一閃”

ズバンッ！！

一切の抵抗を許す事なく斬り裂いた。

バシヤバシヤバシヤツ！！

僕の足下にバラバラになった肉塊が赤い液体を飛び散らせながら頃がって来る。

また返り血を浴びた。

「……………永伽……………お姉……………様……………」

永琳が僕の名前を呼ぶ。

僕は振り返る。

今でもその瞬間、永琳が僕に初めて見せた表情が忘れられない。

何故なら僕を見ている目が恐怖に見開かれており、呆然としていたからだ。

まあそれは仕方がないと思う。

だって……………

返り血で顔の半分を染めて……………

半笑いで血まみれの正宗を見つめていたから……………

そしてそのまま僕と永琳は騒ぎを聞きつけた警察に保護された。

(次回に続く)



第7話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第8話（前書き）

鬱展開継続……………

それでは第8話始まります。

## 第8話

いきなりですが僕は今八意家の当主として父様と母様のお葬式を行っています。

「……………お姉様……………」

そう呟きながら永琳が僕の服の袖を握り絞める。

「……………」

僕はそんな永琳を自分の背中に隠して目の前にいる人物達を睨みつけた。

「……………永伽様、私の息子は今独り身なのですが婿にいかがでしょうか？親である私が言うのもなんですが、顔も整っておりまして、学歴の方も申し分ありません……………我が一族の血筋も名門である八意家に引けを取ることはありませんからねえ……………」

そう僕に言ってくるのは過剰な脂肪を蓄える初老の男。

「いやいや私の息の方が……………」

「いや、私の方が……………」

その周りにいる同じような体型の男達もそう言って上辺だけの笑みを浮かべて近づいてくる。

よく耳を澄ましているとその中に永琳に縁談を持ち掛ける声も聞こえた。

「……………」

僕はそんな連中をあの時……………父様と母様が死んだ時に僕の胸に宿ってしまった”冷たい心”を表に出して睨み続ける。

こんな……………

こんな時に彼らは……………

そんなにも……………

そんなにも僕達姉妹に取り入って権力が欲しいのだろうか……………

ギュッ

自然と握り絞める拳に力が入る。

「……………な……………」

「え？」

僕の声が聞き取れなかったのか男が聞き返してきた。

だから僕は……………

「八意家当主として命ずる！！二度と僕達姉妹に近づくな！！今の場は死者を悼み天に送り出す神聖な場所……………そのような下賤な考えを持つあなた達はこの場所にふさわしくない！！……………即刻……………この場から立ち去れ！！」

そう怒鳴ったのだった。

すると男達は苦虫を潰したような表情を浮かべてその場から立ち去っていく。

その男達は周りの人からも敬遠されていたらしく彼らが立ち去った後、僕に向かって一礼する人達がかなりいた。

しかし永琳は先程の男達のせいなのか相変わらず僕の後ろから出てくる気配はない。

僕はそんな永琳を落ち着かせる為に頭を撫でる。

「……………もう大丈夫だよ永琳」

僕は永琳にそう言って撫で続けた。

それを聞いた永琳は僕に抱き着き、声を殺して泣きはじめる。

それを見た僕は永琳を優しく抱きしめてこれ以上の悲劇が起きない事を祈った。

しかし

その祈りは叶うことはなかった……………

なぜならそれから僅か4日で街中で反乱が起き、街が戦場になった。

反乱を起こしたのはあの時僕が怒鳴った男達であり、しかも父様と母様を死なせた連中に指示を出していたのも彼ららしい。

それを聞いた僕は八意家当主の座を永琳に譲り渡して正宗を手にも  
れ続けた。

何故八意家当主の座を永琳に譲り渡したのかというところ……薄  
汚れた血にまみれた僕自身が当主の座に居座り続けるのはおかし  
いと思っただけだ。

その時に永琳は嫌がっていたけれど強引に僕が押し付けてしまった。

そして……それから内乱は3年間続く事となる。

それは……気がおかしくなりそうなほどに長い時間。

そして、その長い戦いのさなか……

僕の成長が止まった。

気が付いたらいきなり止まっていたのだ。

髪や爪は伸びることはなく、体重が増減することもない。

しかも何故そうなったのかは分からない。

それに気が付いたのは本当に偶然で、僕の事をいつも心配して見てくれる永琳に指摘されて気が付いた。

でも僕にはそんなの関係ない。

今は一刻も早く反乱を起こした彼らを捕まえなくてはならないからだ。

それに……………

彼らには聞かなくてはならない事がある。

その為にも僕は今日も戦い続ける。

そして……………

そんな長い戦いの日々も………

間もなく終局を迎えようとしていた。

第8話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第9話（前書き）

永伽無双注意！

それでは第9話始まります。

## 第9話

いきなりですが僕は今ホテル地下にある上にある街がすっぽり入ってしまっただけ、かなり広いコロシアムのような場所にいます。

ギューーン！

そんな音が薄暗く非常灯しか点灯してないコロシアムのあちこちから聞こえてくる。

後ろを振り返ると僕が入ってきた入口が金属製の分厚い扉で封鎖されていた。

「……………罨だね……………」

僕は封鎖された入口を見てそうポツリと呟く。

……悪党が考えそうな事だ。

僕はそうため息を吐きながらそう思う。

ブウン！

「……ご機嫌いかがかな元八意家当主 八意 永伽……いや、こっ呼んだ方がいいかもしれないね？」

”八意家の猟犬”？」

それはいきなりだった。

音がした方向を見るとコロシアムの中央である時見たあの男が大きなモニターに映し出されて僕に向かってそう言うてくる。

それを見ていた僕は

「……………後で届け物を渡しにそっちに行くから……………」

ズバンッ！

そう言って正宗に魔力を纏わせて振り抜き、魔力で作った刃でモーターを真っ二つに切り払った。

バンッ！！

それをきっかけに一気にコロシウムに明かりが灯る。

「塵も積もればなんとやら……………って奴なのかな？」

それは明かりが灯ったコロシウムの中の光景を見た時の僕の感想だった。

何故なら……………

ギユオオオオオオン！

キュイーン！

そんな機械音が響き渡る。

「……………」ガードスコーピオン」

その名の通りまるでサソリのような尻尾に四本の足を持ち、人型の上半身に両手がマシンガンになっている青いロボットが目測で約一万くらいはいた。

「……………無駄遣いもいいとこだね」

僕は冷たい心のまま正宗を構えてそう呟く。

そんな僕の呟きに反応してガードスコーピオン達が僕に向かって一斉にマシンガンを構えた。



「はああああああああああああああ！！！」

その中を僕は僅かに間隙間を縫うように前に進む。

セフィ〇スを模しているこの体なら弾丸が止まって見えるし、避けるのは簡単だ。

だが油断はしない。

僕は勢いをつけて前衛を務めているガードスコープオン達に近づくと

「八刀一閃！！！」

ズバツ！

最初に八体まとめて切り払った。

斬られたガードスコープオン達はバラバラになり、ただのガラクタへと変わる。

しかしまだガードスコープオンは文字通り山のようにいるからこの程度では意味がない。



ガードスコープオン達は為す術もなく次々に雷が直撃して爆散していく。

この攻撃で恐らく残り七千くらいには減らせただろう………

ピーッ！

「ッ！？リフレクッ！」

不意を突かれた僕は咄嗟に防御魔法を唱えてこっちに向かって放たれたレーザーをガードする。

見るとガードスコープオン達が一斉に尻尾を立てて、その先を僕に向けていた。

「……………少し驚いたよ……………」

僕はそう言うと右手に魔力を纏わり付かせて……………

「……………」アルテマ……………」

白い閃光が辺りを包む。

そして……………

大爆発を引き起こした。

「……………ずいぶん寂しくなったね……………」

それはあの爆発の後、爆煙が晴れた時に僕が呟いた言葉だった。

何故なら僕を中心にして半径5?が底の浅いクレーターに変わって  
いたからだ。

あれだけいたガードスコープオン達はもはやガラクタ同然の姿でそ  
こら辺に頃がっている。

「……………」





「……………相手が僕以外だったらね

” 霊刃一閃”

ザツ!!

一瞬の移動攻撃により大量の血飛沫がコロシラムの中に飛び散った。

霊刃一閃はやはりセフィオスの使う剣技の一つである一閃をアレンジした技で、こちらも攻撃範囲が格段に広がっている。

キングベヒーモスはその巨体から繰り出される強力な攻撃を一度も出す事なくバラバラの肉塊に変わってしまった。

ヒュン!

僕は正宗を一度だけ振って血を払い歩く。

そして……………

「……………大きいだけじゃ勝てないんだよ」

僕はそう言ってあの男達のいるはずの場所に向かって歩き続けた。

## 第9話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

## 第10話(前書き)

できました(^o^)/

それでは第10話始まります。

## 第10話

いきなりですが今僕はため息を吐いています。

「……………逃げたんだね」

僕は誰もいなくなった司令室だったと思われる場所でそう呟いた。  
ふと横を見ると僕が入って来た入口とは別に扉が開いたままになっている長い通路が見える。

しかもその通路は緩やかな上り坂だ。

「……………逃げさない」

そう呟き僕は彼らが逃げたと思わしきその通路を進もうとして……………

見つけた。

「……………これって……………」

僕の目に映るのは「ショーケースに入れられた」とあるモンスターマシン”

思わず笑みが零れる。

ビリビリビリッ

僕はそのモンスターマシンに乗る為に邪魔な長いスカートの前部分を引き裂いた。

ショーケースのガラスを開き、状態を確認すると

「燃料も入ってるしキーは刺さってる……………いけるー!!」

僕はその結果に満足して”ソレ”に跨がる。

そしてキーを回してエンジンに火を入れた。

ブオオオオオオン!!

力強いエンジン音が”ソレ”から響き渡る。

その無骨なエンジン音に僕は喜びを隠しきれない。

何故なら……………

「行こうか……………」ハーディ・デイトナ」

モンスターマシン……………ハーディ・デイトナに僕のボディを軽く撫でてそう呟いた。



「なんとかなったな……………」

その眩きは紫煙の立ち込める車内に消える。

それは黒塗りの高級車の中での事だった。

その車の護衛として前に4台、後ろに6台軍から横流しした最新鋭の装甲車が護衛に当たっている。

そしてその車内にはあの司令室にいた初老の男達。

その顔には永伽から逃げ切った事による安堵の表情が浮かんでいた。

「奴はもう追って来ないだろうな？」

そう言うのはコロシウムで永伽と話していた男。

どうやら彼らはあの時コロシウムで永伽が戦っている映像を見てあれだけの戦力では勝てないと気が付いて逃げ出したようだ。

「ああ、あそこには私達を追えるような乗り物は存在しない」

そしてその問い掛けにある一人の男がそう答えた。

それは己に対する自己暗示だったのか……………

それは誰にも分からない。

しかしそれつきり誰も話す事はなかった。

沈黙が車内を包み込む。

しかし……………

沈黙は突然破られる事となる。

それは

「……………ん？あれはなんだ？」

気まずい沈黙のあまり窓の外を眺めていた一人の男の言葉だった。

ザキユンツッ！！

突然そんな音が聞こえて後方で護衛をしていた装甲車2台が真つ二つに斬り裂かれる。

「……………そんな馬鹿な……………」

見ていた男は驚きのあまりそう呟くしかなかった。

何故ならそこにはハーディ・デイトナに跨がり、左手には正宗を構える永伽の姿が見えたからだ。

「何故あれを乗りこなせるのだ……………」

男は信じられないものを見たような表情を浮かべてそう呟く。

しかし、この男がそう呟くのも無理はない。

その理由としてあげられるのは、あのモンスターマシンはあまりに

もエンジンの馬力が強過ぎ、熟練のプロのライダーでも乗りこなせないほどの孤高のマシンだったからだ。

だからこそあの時の問いであるこちらを追い掛ける事のできる乗り物がないかと聞かされた際にこの男は無いと答えた。

だが今はどうか？

異変に気が付いた残りの装甲車が上部に取り付けられた機関銃を発砲する。

しかし永伽はそれを回避しつつ正宗を構えた。

ザウンッ！！

また1台奴に喰われた。

車内でも異変に気が付いた同志達が騒ぎ立てる。

そして前を護衛していた装甲車も異変に気が付き後ろに下がって機関銃を発砲、永伽が男達の乗る車に近づくのを阻止した。

だが……………それはただの時間稼ぎでしかなかった……………

ズンッ！！

「……………え？」

一瞬何が起きたのか理解出来なかった。

何故ならいつの間にか永伽の手元にあった正宗が自分達の乗っている車の運転席を天井から貫いていたからだ。

慌てて永伽の方を見ると永伽の手元には正宗は存在している。

「……………奴は能力保持者なのか……………」

無意識にそんな言葉が口から漏れていた。

一度狙われたらどこまでも追い詰める猟犬のような存在。

それこそが永伽の異名である八意の猟犬と言われる由縁でもあるのだが、この時男はこの由縁が本当の事であることを身をもって体験することとなった。

ザンツ！！

また1台喰われた。

もう残りは3台しかない。

しかもこちらは運転手を失って徐々に減速し始めているのだ。

「……………なんて奴なんだ……………」

まさに圧倒的。

これだけの戦闘能力を見せつけられて男はある感情を味わっていた。

その感情は永伽が彼らにもっとも味わわせたかった感情……………

永伽はそれを直接男達に届けるつもりなのだ。

だが永伽はまだ気が付かない。

すでにその感情……………”絶望”感を彼らに届けることが出来て  
いる事に……………

ズバンツ！！

残りの装甲車も喰われた。

その光景を見ていた男達は瞬時に理解する。

もはや彼女からは逃げられない事を……………

その後男達は永伽に捕まり3年もの間続いていた反乱はようやく解決する事となる。

しかし

それが新たな動乱の始まりを告げる合図だった事に誰も気が付く事もなく……………

第10話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

番外編 1 (前書き)

今回は永琳サイドです。

それでは番外編 1 始まります。

突然ですが私には姉がいます。

美しく艶のある長い黒髪にお母様に似て身長が低いのにスタイルがいい………確か”ロリ巨乳”というのでしたか？

その事をお姉様がとても気にいられたのを今でも覚えています。

しかし、私としてはそんな事を気にする必要はないと思います。

何故なら………そのスタイルこそお姉様の魅力が一番引き出しているからですっ！！

触ればマシユマロよりも柔らかく、それでいて張りを失わない胸に無駄な脂肪の無い引き締まった身体………

それでいて女性らしい柔らかさを失わないスタイル………

極めつけはお母様似のあどけなさが残る可愛いらしく整ったお顔………

……ハアハアハアハア……鼻出血が止まりま  
せん……少々お待ちを……あぁ……お姉様……

《しばらくお待ちください》

大変失礼いたしました。

お姉様を思うと姉妹や同性であるというタブーを侵してしまっても  
いいという感情を抑えきれなかった未熟な自分のせいで大変お見苦  
しい醜態を晒してしまった事に謝罪いたします。

まぁ……反省も後悔もしていませんが。

……とにかく今回はそんなお姉様と私の話をたっぷり懇切  
丁寧に……そうですね……本にすれば800冊くらいにして語  
って差し上げましょう。

……え？そんな時間は無い？

……分かり

ました。

時間が無いのなら仕方ありません。

ならば私が何故お姉様をお慕いしているのか……

今回はそれを語らせて頂きましょう。

あれは忘れもしない………10年ほど前の事だったでしょうか

………

あの頃の私は人として最低な存在であったのを覚えています。

そうなった原因は簡単。

私が希代の大天才だったからなのです。

その為、両親や周りの大人達は私の事を神童と呼び、蝶よ華よとても可愛がられて育った私は随分と捻くれた性格をしていました。

どんな性格だったのかというと自分より頭の悪い人、身分の低い人を見下す傾向にあったのです。

そして、その中にはもちろん自分の家族も含まれていました。

表では愛想を振り撒き、裏では蔑む。

そんな二つの顔を持つ最低の人間。

それが当時の私です。

しかし

そんな腐ってしまった私の本性を見抜き、一人にしないようにしてくれる人がたった一人だけ存在しました。

たった一人私を見つめてくれた存在……………

その人物こそお姉様でした。

私の本性を知っても変わらず笑顔で姉として接してくれるお姉様…

……………

それは私にとって未知の存在でした。

当時、理解できなかった私はそんなお姉様を敵か味方か判断する為にいろいろなた事を試すような真似をして随分困らせてしまったのを覚えています……………

しかしお姉様は犯人が私であると分かっているがらいつもと同じように笑顔で接してくれる……………お姉様はそんな器の大きな人でした……………

そんな器の大きなお姉様に私は嫉妬に似た感情を持つ事となるのですが……………

ある事件をきっかけに私はお姉様に今までの感情が嘘だったのかのように惹かれていきます。

その事件とは……………

私、八意 永琳暗殺未遂事件です。

~~~~~

それは今から10年ほど前の事です。

この事件の発端は私が携わる研究に必要な人材を集めている際に資料だけで無能と判断し、切り捨ててしまったとある研究員が私に憎しみの感情を抱いた事なのです。

そして、その研究員は別の講演会に参加し、裏口から帰宅しようとした私に隠し持っていたナイフで襲撃してきました。

しかし

そのナイフが私を傷付ける事はありませんでした。

「永琳!？」

ドン!

偶然……… 本当に偶然私を迎えに来ていたお姉様がその現場を見て私に体当たりし………

ザクツ!

「あう！！………うああ………ッ！？ガハッ！！」

ドサッ！

ナイフはお姉様の腹部に刺さり、お姉様は血を吐いて倒れ込みました。

「永伽お姉様ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

私は目の前の光景が信じられずに思わず叫んでしまい、辺りは騒然としていました。

その後、病院に搬送されたお姉様は適切な処置を受けて傷痕を残す事なく退院する事ができたのですが………

実は私がお姉様に惹かれるきっかけになった出来事はここにあるのです。

お姉様が意識を取り戻した時に真っ先に私の事を呼びました。

いや、殺されたと言った方が正しいですね。

しかも犯人はすでに割れています。

犯人は八意家の権力や地位を私達姉妹ごと手に入れようとした薄汚いゴミども……………

まったく……………くだらない連中ですね。

そのせいでお姉様が私に当主の座を強制的に譲り渡し、復讐の戦いにその身を投じる事となってしまったのですから……………

まあ連中が反乱なんてくだらない真似をしてくれたおかげでお姉様の復讐に終止符を打つことができましたのだけれども、そのせいで今お姉様は……………壊れ始めています。

……………無理もないですよ？

元々お姉様はとても優しい心を持った方なのですからね……………

今も部屋に籠って罪もない人々を殺してしまった罪悪感を感じて、悪夢を見続けているのでしょうか……………

一度お姉様が苦しそうにうなされているのを見た事がありますけど

……………

変わるものなら変わってあげたいくらいに凄まじいものでした。

謔言で何度も何度も誰かに謝り続け、涙を流して飛び起きる。

そんな事が一晩中続くのです。

私としてはそろそろお姉様を休ませてあげたいですね……………

静養の地に相応しいとすれば誰にも縛られない汚れの無い世界……………
あえてあげるとすれば……………”月”……………が一番いいかもし
れません。

……………候補の一つとしてあげておきましょう。

まあお姉様を助けてあげられない無力な妹としてできる事はこれくらいですね……………

しかし

これだけは覚えておいて頂きたい。

私、八意 永琳は……………

たとえお姉様が地獄に墮ちようと、冥府魔道どこまでも着いて行く事を！！

番外編 1 (後書き)

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第11話(前書き)

少し編集しました

それでは第11話始まります

第11話

いきなりですが今僕は平和な時間を楽しんでいます。

「かあさ〜ん！！」

休日で賑わうデパートにそんな風に僕を呼ぶ声が聞こえてきた。

僕はその声が聞こえてきた方に向かって足を進める。

デパートに遊びに来てすぐに迷子になったその子を僕は必死に探していたのだけど、発見した場所ははぐれた場所からそう遠く離れていなかった。

駐車場を含めて15階あるこの建物を40往復したあげくに自分直属の部隊を動かそうかと真剣に悩んだ僕は思わず苦笑してしまう。

大勢の人がいる中で大声を出しながら僕に抱き着いてくる。

そんな”与一”を抱きしめながら僕は与一の身に何も起こらなくてよかったと安堵するのだった。

~~~~~

.....” 那須 与一 ”

これが本来この子が名乗るべき名前なのだが、今は.....

.....” 八意 与一 ” という名前に性を改めている。

その理由としてはこの子が.....

あの内乱によって生まれた戦争孤児だということ。

初めて会った時、あの子は施設にいた。

誰もいない無機質なコンクリートで固めた部屋に一人佇む幼い子供。

手入れしていない腰まである長い黒髪にボロボロの衣服。

そしてその身体は痛々しい程までに痩せ細っている。

しかも僕が部屋に入ったのに虚ろな目をしたまま動かない。

それが最初に僕が見た与一の姿だった。

「……………」

その痛々しい姿を見た僕は声が出ない。

実はこの子に会う前に僕はどんな理由があつてここに保護されているのかまで知っている。

その理由とは、目の前で家族を失うという事……………それも近くに着弾した砲撃によってバラバラに引き裂かれた瞬間をその目でみていたのだ。

故にある程度は覚悟していたのだが……………これはひどすぎる。

「……………永伽様？時間もありませんので次に参りましょう」  
不意に案内役として僕を案内していた施設の職員が沈黙していた僕に声をかけた。

どうやらこの無機質な空間に耐え切れなくなったようだ。

しかし、僕はもう一度その幼い少年を見て  
「……………うん、決めた。」

あの子を僕の養子に……………僕の子供として引き取るよ  
「  
ゆっくりと頷いてそう案内役の人に伝えたのだった。」

「……………一応言い訳を聞きましようか永伽お姉様？」

それは家に帰って与一を養子にした事を永琳に伝えた時の永琳のセリフだった。

「い、いやね永琳？一目見ただけでこれは連れて帰らないと思って思ったんだよ……………だ、だからね永琳？そんなに怖い顔して近寄らないで……………」

僕は発言するたびに顔を近づけてくる永琳にどんどん僕は後ずさりしてしまう。

こんな事あの反乱で苦しい戦いを戦い抜き、敵からは八意の猟犬、味方からは八意の戦乙女・八意の長刀などと呼ばれる僕を知る人ではまったく想像できない姿だろう。

実の妹に責められる英雄……………

それは他人が見れば自身が見た光景が幻覚だったのでは？と病院を受診しに行こうとするくらいにシュールな光景なのだ。

「…………ふう……………それで?……………本当のところは?」

不意に永琳がため息を吐き、僕の目を見て真剣な表情を浮かべてそう言う。

その瞳には嘘ついてる事は分かってるんですけど言っている……………

「……………あううう……………やっぱり永琳にはごまかせないかあ……………」

僕はそんな永琳の表情を見て顔を引き攣らせながら素直に降参した。

永琳はまた、ため息を吐き僕に話を促す。

そんな永琳に苦笑しながらも、僕は永琳に全てを語ることにした。

あの子……………」 那須 与一」 について僕が思っている事を……………」

「……………僕はね永琳……………あの子を……………与一を普通の子供に育てたいんだよ」

それはまず最初に僕が永琳に伝えたい事。

そしてその言葉に永琳は首を傾げた。

僕はどこか自嘲的になりながらもまた言葉を紡ぐ……………

「……………与一はね……………一目見た時から異能者だつて僕は気が付いたんだ……………それもかなり強力な”破魔”の力にね……………多分それを使いこなす才能もかなりあの身体に眠ってる……………まさに英雄となるべくして生まれてきた子供だよ与一は……………」

それを聞いた永琳は目を見開いて家に連れて帰ってきた時に僕の部屋で寝かせた与一のいる方角に目を向ける。

「そんな馬鹿な事が……………」

無意識に呟いたのだろう。

永琳の口からそんな言葉が漏れた。

まあ、それは無理もない話だろう。

多分僕が同じ言葉を聞かされても、実際に見てみない事には信じら

れないはずだ。

驚きのあまりに固まる永琳。

けれど僕は

「でも……………あの子の目は死んでたよ……………あの時の僕よりも深く濁ってた……………このままだとあの子は……………」

そう言っつて永琳を見つめた。

それを聞いた永琳はピクリと肩を震わせ、ぎこちない動きで僕の方を見る。

その顔には悲しみを浮かべたまま……………

「だからこそ……………だからこそ僕はあの子に与えられるはずだった愛情を注ぎ、普通の子供として育て上げたいんだ……………永琳なら……………分かってくれるよね？」

僕は久しぶりに……………もう浮かべる事はないだろうと思っていた  
心からの笑顔を永琳に見せる。

それを見た永琳は静かに涙を流しつつも

「……………それが……………それが永伽お姉様の選んだ事ならば……………  
私が……………私が反対するわけないじゃありませんか……………」

笑顔でそう言ってくれた。

こうして僕の子育て生活が始まったのだった。

~~~~~

永琳の同意を得て、実際に子育てを始めたのだけど………苦難の連続だった。

「……………かあ……………さん……………」

「ふ、ふえ！？よ、与一？今なんて……………」

あの日以来、鍛練以外外に出なくなった僕は思わずいつもの訓練の模擬戦で部隊を指揮していたモニターを放り出し、与一の下に駆け寄る。

なんせ一緒に生活を始めて半年。

自我を取り戻し、他人行儀だった与一が初めて僕の事を”かあさん”と呼んでくれたかもしれないのだ。

モニターの向こうで何か言ってるけどそんなの気にしてられない！

与一が本当にそう呼んでくれたか調べる方が先決だ！

「よ、与一？」

僕は与一の肩を優しく掴みながら顔を覗き込むと……………

「か、かあさん……………」

与一は真っ赤になりながら消え入りそうな音量でそう言ったのだった。

と、いつか今感じている苦勞の8割くらいが永琳絡みなんだよね。

しかも必ずと言っていいほどに僕と与一のツーショットを狙ってる

.....

前に親子丼なんて言ってたけど.....妙な寒気が背中に.....

と、とにかく！

与一は僕が守るんだ！！

主に貞操を.....

………なんだから自分で言っただけで悲しくなってきたのはなん
だろっ？

ちなみにそれから与一が6歳の誕生日を迎えるまでに永琳との熾烈
な戦いがあった事をここに記しておくよ………

また語る機会があれば………

うっん、やっぱり語りたくないや………

~~~~~

（現在）

「かあさん 見つけてくれてありがとう」

与一は僕と手を繋ぎ、眩しいばかりの笑顔でそう言ってきた。

「どう致しまして もう手を離しちゃダメだよ与一？」

僕はそんな与一に笑顔で返してついでに手を離さないよう釘を刺しておく。

「うん 絶対に離さない」

しかし与一はそんな言葉を気にする事なく笑顔でそう言ったのだった。

やれやれ……………そんな気分で僕は与一を見つめるのだが……………

「……………こんな日があっても……………罰は当たらないよ……………」

ね？」

そう言っつて与一と繋がる手に少し力を入れてデパート内を突き進む。

こんな日が毎日訪れる事に感謝しながら……………

第11話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

与一の案を下さったキャビア伯爵さんありがとうございました。

第12話(前書き)

できましたよ ( )

それでは第12話が始まります。









だんだん楽しくなってきた。ちやっつて気が付いたら母様に

『もう教える事は無い……………といつかいつの間に覚えたんだ……………』

つて言われちゃった。

……………おっと……………話が逸れたね。

今現在、昼食を終えた永琳は途中だった研究を続ける為に部屋へ引き上げ、与一は僕から少し離れた所で本を読んでいる。

まあこれが最近の僕達の日常のスタイルなんだけど……………

たまに……………こんなに平和でいいのかな？つて思う事がある。あの男達が起こした反乱で僕はかなりの量の血で手を汚してしまっただ……………

こんな僕が平和な時を過ごす……………

それがどこか場違いな気がして……………

……………やめよう。

今はそんな事を気にしてる時じゃない。

せっかく勝ち取った平和なのにそんな事考えてたら気分が落ち込んでしまう。

「……………よし」

僕は小さく頷き、目の前の仕事……………皿洗いを再開した。

だけど……………

「……………かあさん」

「ふえ？どうしたの与一？」

いつの間にか近くに来ていた与一が僕の服の裾を引っ張りながら言った一言で僕はさっきまで考えていた事が一気に消え去ってしまった。



~~~~~

「本の読み過ぎですね」

そう言つて与一に2分で完成させた白い縁の四角いメガネを掛ける
永琳。

その服はまだボロボロのままだ。

見えちゃいけないモノがたくさん露出してる。

「変な感じがするー」

対する与一は掛けてもらったメガネを付けたり外したりしながらそ
んな事を言っていた。

「もう……………心配させて……………はあ」

僕はため息を吐きながらその様子を見つめてこつこつ思つ。

やっぱり……………平和が一番……………だよね。

「……………あ、私の部屋」

「あ!……………ご、ごめんなさい!」
最後がなんとも締まらない僕達なのでした。

第12話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見・感想お待ちしております。

第13話(前書き)

できましたよ

それでは第13話が始まります。

第13話

いきなりですが僕は今かなり恥ずかしいです。

「……………ううううう……………着替えちゃ……………ダメ？」

「ダメに決まってるじゃないですかお姉様」

カシャ！カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシヤ！

涙目の僕にカメラを構えてシャッターを押し続ける永琳。

その顔はどこかかなり晴れやかで赤い忠誠心が流しっぱなしだ。

てか点滴台に輸血パックが10パックくらい下がってて、それぞれから伸びるチューブは右腕と左腕に半分ずつ繋がってる。

てか出血量と輸血量が同じなんじゃ……………

なんで僕がこんな目にあっているのか。

それは前回、与一のメガネな事件において僕が永琳の部屋を瓦礫に変えてしまったからである。

つまり簡単な話が自分の部屋を瓦礫にしたから写真を撮らせろという事なのだ。

でも……………だからって……………

「……………なんでイヌ耳メイド服なの？」

しかもなんだかヒラヒラとリボンが多くて恥ずかしいよ……………／／／／

そう思っている服への恥ずかしさから僕は内股気味に膝を擦り合わせていると

「それはお姉様には子犬っぽい雰囲気がとても良く似合っからです……………決して……………メイド服の写真はまだコンプリートしないからなんて理由じゃないですよ？」

「ふう……………満足です」

そう言っつて永琳は額の汗を拭う。

「あうあうあう……………恥ずかしいよお……………／／／／／」

僕は初めてする女の子座りのまま身もだえしてそれどころではない。

普段は座る時には正座なのに今は力が抜けて正座が出来ないよ……………

……………

「ムフフ……………そろそろ食べ頃ですかね？ジュルリ」

そんな僕を永琳は怪しそうな光る目で見ている……………

……………ん？

「大丈夫ですお姉様 天井のシミを数えていたら気持ちいいまま終わりますよ」

永琳は邪心を抱いてるとは思えないような笑顔を僕に向けてそう言った。

「……………ちっとも安心できないよ」

そんな僕の言葉を素晴らしくスルーした永琳はそのまま半脱ぎの僕に覆いかぶさるうと……………

スパーンッ！

「ただいまー！今日はともだちをつれてきたよー！」

「綿月豊姫です」

「失礼ですよお姉様……………妹の依姫です」

与一が帰ってきた。

八意家に並ぶ名家の綿月家の姉妹とともに……………

二人は互いにこう思った。

助かった……

しかし……

「……………もう少しゆっくりしていきなよ」

「ヒイツ!?!」

それは背中に氷を入れられたかのような感覚。

ふと横を見ると先程まで永琳の下にいた永伽が正宗を持ったまま笑顔で立っている。

イヌ耳メイド服のまま

しかし、その目はまったく笑ってはおらず、そこには先の反乱を沈めた英雄としての威圧感と存在感があった。

「……………ガクガクブルブル」

二人は互いに抱き合い、涙目で震えている。

「……………少し……………O H A N A S I I しよっか」

それは……………死刑宣告だった。

その後、豊姫と依姫は4日間八意家から出て来る事はなく、出て来た後も決してその時の事を話さなかったという。

第13話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第14話(前書き)

少し訂正しました。

それでは第14話が始まります。

第14話

いきなりですが今僕は”修行”をしています。

「……………もうダメえ……………」

「いっそ……………殺してください……………」

限界ギリギリ……………そんな言葉が似合う声×2が僕の下から聞こえる。

だから僕は笑顔であえてこう言う。

「……………”特訓プラン特Aコース”あまりの酷さに神々も逃げ出すぞ……………”に変更しようかな？」

町中に響き渡る叫び声をあげて僕を驚かせてくれたよ。

なんで？

~~~~~

「……………なんで私達こんな厳しい修業を受けてるんだろっ……………」

豊姫は鍋をおたまで掻き交ぜながらそう呟く。

すると隣で材料の分量を計測していた依姫が

「……………お姉様……………それは私達が与一のことを狙ってるのを永伽様も永琳様も知ってるからですよ……………あと掻き回し過ぎです、お豆腐が崩れてしまいます」

そう言つて豊姫のおたまを握る手を止める。

豊姫はハツとして

「危ない危ない……………また失敗してお料理特訓プランク一流の料理人を越えろくをやらされる所だったよ……………あ、あれ？……………思い出したら急に寒気が……………」

ガクブルと震えていた。

「お姉様……………」

依姫はそんな豊姫を見て同情の視線を向け……………

「……………あれ？……………私の身体も震えが……………」  
やっぱりガクブルしていた。

「……………やっぱりトラウマになりましたねお姉様」

「……………だよねえ……………でもちゃんとこなしてるから偉いよ」  
その様子を気配を消した状態で影から見ている僕と永琳はそんな会話をしていた。

この綿月姉妹がこんな風にトラウマを抱えているのには訳がある。

それは与一に一目惚れしてしまったからだ。

養子とはいえ与一は八意家の前当主であった僕の娘……じゃなくて息子。

しかも僕は前の反乱において英雄と呼ばれた存在でもある。

なので与一が僕の養子となって1年がたった頃から許婚としての誘いが数多くあったのだ。

その時の与一の年齢は5歳。

僕はそんな小さな与一を使った権力の奪取という下心が見え見えな誘いを全て断り、与一が自由に恋愛できるように環境を整えた。

それによって相当な恨みを買ったけどそれを別の案を永琳があげる事によって鎮静化させる事に成功。

その案とは……”月への移住計画”。

何故その案が事態の鎮静化に繋がったのか……簡単に説明すると地上には妖怪と呼ばれる存在がいて、その妖怪の力の源でもある汚れた力……妖力が空気を伝って人間の寿命を削っているから人間は老いて死んでしまう。

しかし、月に移住する事ができれば地上に蔓延するその汚れから解放されて不老になる事ができるのだ。

この案を出した瞬間に僕達を恨んでいた連中は手の平を返したように笑顔で歓迎してきたのには流石に僕と永琳も呆れてしまったもの

だけど、これにより与一に関心を持つ人達は極端に減った。

だから僕と永琳は安心して与一を影からの護衛付き（永伽の私設部隊）で外に出す事ができたのだけど……………

そんな時に現れたのが名家八意家に匹敵する名家の綿月家の姉妹、豊姫と依姫なのだ。

僕と永琳は予想だにしなかった事態に慌てて綿月姉妹を監き……………じゃなくてO H A N A S Iして二人が与一に一目惚れしてしまっている事が判明した。

きっかけは名家故に友達のいなかった姉妹に笑顔で友達になろうと与一から言ってきた事らしい。

これを聞いた永琳は

「流石お姉様の娘……………じゃなくて息子ですね……………」

と呟いていたけどなんでだろう？

まあそんな感じで知ってしまった僕達は二人の純粹な与一への気持ちに押されて……………母様式の花嫁修行を開始したのだ。

内容はスパルタを超える超スパルタ

ドドドドドドドドドドドドドドドドMな人が信念を持ち続ける事ができる人にしかできない修行なのだが……………

あの時から2年の月日が経ったのだが、今の所二人は悲鳴をあげる

事はあるけど諦める事はない。

相当なトラウマを抱えながらもこの花嫁修行をこなしているのだ。

だからこそ僕と永琳は二人を応援したい。

というか早くこの修行を終わらせて与一の許婚として迎え入れてあげたいくらいなのだ。

「……………与一は幸せ者ですねお姉様　こんなにも好意を示してくれている人がいるのですから……………」

不意に永琳が笑顔でそう言っ僕を見た。

僕は小さく頷いて二人を見つめる。

「ただいま〜！とよひめ　よりひめ　きょうのばんごはんはなあに  
い　」

8歳になってもいまだに舌つたらずな話し方をするソプラノボイスが玄関の方から聞こえてきた。

与一がどつちやら帰ってきたようだ。

聞いているだけで胸がキュンキュンするのはなんでだろう？

料理を作っていた二人は与一の帰宅に驚いているようだけど、キッチンに笑顔で入って来た与一に顔を赤くしながら話しかけている。

その様子を見ているとどこか寂しい感じと微笑ましさに胸がポカポカする感じが感じられた。

「お姉様 私達も行きましょう？二人の料理を採点しなくてはいけませんからね？」

永琳は笑顔のままそう言って僕の手を引く。

「そうだね……………辛口コメントよろしくね永琳」

だから僕は永琳の手を握り返しながら笑顔でそう言った。

それを聞いた永琳は苦笑しつつ頷く。

そして僕達は暖かな空気の中で暖かなご飯を食べるのだった。



第14話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第15話(前書き)

できました(^o^)/

それでは第15話始まります。

## 第15話

いきなりですが今僕は落ち込んでいます。

「……………僕は……………僕だって……………」

僕は今ある事がきっかけで涙目になり、そう謔言のように呟く事ができない。

「お姉様！お気を確かに！」

永琳が何か言ってるみたいだけど全く頭に入っていない……………

「かあさん！しっかりして！」

与一も心配してる。

けど……………



そもそもものきつかけは約30分前に行っていた二人への花嫁修行後での豊姫の何気ない一言からだった。

~~~~~

「……………という訳だからお茶の出がらしは乾燥させて畳の掃除の時に先に撒いておくと埃なんかが取りやすくなるよ？覚えておいてね？」

僕は二人が分かったかどうか確認しながら今言った事を黒板に書いていく。

「はい！分かりました！」

そんな中、二人は元気よく返事をし、自分の机の上にあるノートに僕が書いた黒板の内容を書いていた。

そんな二人を微笑ましく見守りながら時計を見るともうすぐお昼になるところ……………

「……………うゝ……………楽しそう……………」

僕は人差し指を口にくわえながらそんな二人を見つめる。

二人はそんな僕に気が付いた様子はなく、楽しげな談笑をしていた。

その楽しそうな雰囲気になんて耐え切れなくなった僕はその場を離れようとして……………

「……………そういえば依姫？なんで永伽様って結婚しないのかな？」

不意にそんなのんびりとした豊姫の声が聞こえてきた。

「お、お姉様！？そんなとんでもない事を言わないでください！死にたいのですか！？」

依姫は慌てたようにそう言うと周りを見る。

僕はとつさに物陰に隠れてすでに消している気配をさらに薄くした。

すると周りに誰もいないと思ったのか依姫は大きなため息を吐く。

「……………命を捨てるつもりですかお姉様？」

依姫はドスの効いた声で豊姫にそう言う

「いやいやいや、そういう訳じゃなくてね？見た目が10代後半くらいから………というかそれより幼く見えるわよね………まあとにかく、全然外見が変わってないから忘れそうになるけど永伽様って確か今年でもう24歳だよね？」

豊姫は両手をバタつかせながら依姫にそう聞いた。

すると依姫は

「………確かにそうですね………もうそろそろ適齢期を過ぎててしまいますね………」

そう言っつて顎に手を当てる。

適齢期というのは一般的に僕達の世界での結婚年齢の事なんだけど

………

その範囲が16〜25歳なんだよね………

………あれ？

もしかして僕………遠回しに”行き遅れ”って言われてるのかな？

「………グスッ」

なんでだろう？

目から熱い液体が………

その後、哀れなイケニエの悲鳴と狂ったような嘲笑が連続して起こる爆発の中で聞こえたとかなかったとか……

ちなみに……

「かあさん………ぼくがかあさんをまもる！」

与一が僕を抱きしめながらそう言ってくれた。

「ありがとう与一………グス」

僕は嬉しくなりそう言つと

「よしよし」

笑顔で頭を撫でてくれる。

「ふふ………ありがとう」

与一が僕を撫でてくれたおかげですっかり元気になりました

第15話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第16話(前書き)

ちよい甘

それでは第16話が始まります。

第16話

いきなりですが僕は今ハラハラしています。

そこはとある道場。

そこには両手に模擬戦用ナイフを持ち構えた与一と黒い短髪の若い男がいた。

「てりゃ！」

そんな掛け声とともに与一は右手に持ったナイフを目の前にいる男に突き出す。

「甘いぜ！」

しかし男は突き出されたナイフを左手にもったナイフの腹で払い、右手に持ったナイフで与一の首元に向かって切り付ける。

「あわわ！」

それでもナイフを払われた与一はバランスを崩しながらも左手のナイフの刃で突き出されたナイフの刃をなぞるようにしてずらし回避する事ができた。

「まだだ！」

しかし与一の危機はまだ終わらない。

攻撃が失敗するのが事前に分かっていたのか、男は右手に持っていたナイフを与一に向かって至近距離で放つ。

「ひう！」

与一は飛んできたナイフを両手のナイフで弾いて崩れていた体勢を整えるが……………

「また俺の勝ちだな」

与一の首にナイフが当てられていた。

男は与一が体勢を整える僅かな間に接近して与一にナイフを突き付けたのだ。

「また負けたあ……………強過ぎだよ”師匠”」

与一はガックリと肩を落として落ち込み、涙目になっていたが

「いやいや、10歳でそこまで出来たら十分だろ？」

”師匠”と呼ばれた男はそう言って与一の頭をグシグシと乱暴に撫

でるのだった。

~~~~~

「お疲れ様」

僕は今まで模擬戦をしていた二人に近づいて持参していたお茶を渡す。

「ありがとう」

「お？ありがとうございます」

二人は笑顔で僕が渡したお茶を飲み、程よく疲労した身体を休める。

与一はお茶を飲みながら

「また負けたあ……………今日は調子良かったんだけどなあ」

そう僕に愚痴りながら落ち込む。

その話し方は二年前までであった舌っ足らずな話し方ではなく、まだ幼い感じは残るものの少しずつだが直ってきている。

「はは！まだまだ弟子には負けられないぜ！」

その愚痴を聞いた”師匠”と呼ばれた男はニカツと笑いながら与一の頭をまたグシグシと撫でた。

「あわわわわわわ！」

乱暴に撫でられた与一は目を白黒させている。

「僕もあそこまで”仁”についていけた与一はすごいと思うんだけどなあ……………」

そんな二人の様子を見ながら僕はそう呟く。

実際にあの後に何度か模擬戦を行ったのだけど、与一は”仁”の隙をついて何度かいいところまで行ってはいた。

しかし、最後は”仁”に巻き返されて負けたのだ。

「だろ？俺も何度かヒヤヒヤしたんだぜ？与一が本当に10歳児なのか疑うところだったぜ」

僕の呟きを聞いていた”仁”も頷きながらそう言って肩を竦めた。

すると与一は

「師匠にまだ勝ててないもん！」

そう言って頬を膨らまして怒った。



正があつたのはなんと銃。

剣を使った戦いを主とする僕では与一を十分に鍛える事ができない。  
しかも与一は銃を使いながら近接戦闘を行うのだ。

そんな事僕や永琳の専門外だったので与一に適した戦い方を教えられる人物を探したのだが……………

一人だけ見つけることができた。

” 那須 仁 ”

それは……………与一の遠縁の親戚にあたる人物だった。

現在24歳で身長は175?、体重68Kgの無駄が無い鍛え上げられた細身の身体を持つ彼は与一と同じく破魔の力をその身に宿した英雄としての才能を持つ逸材。

(後で分かった事だけど与一や仁の血族である那須家は退魔の力を持つ一族だった)

しかし、そんな与一のように英雄になる事を約束された彼に転機が

訪れる。

”反乱戦争”

あの私欲と権力に溺れた男達によって引き起こされた3年にも及んだ戦争。

彼はそこで地位や権力に溺れ、自分の妻と仁を売った実の父親をその手で殺している

彼の父親は婿養子で那須家の血を引いていなかった為にそれほど権力を握れなかったのが彼とその妻を売った原因だったといわれている。

その事に気が付いた今は亡き与一の実の父親が仁を救う事に成功したのだが、彼の母親は救う事が出来ず、非人道的な実験材料として利用されて命を落とした。

その時に実の母親を助けようと仁は己の中に眠っていた力を目覚めさせて戦争に参加したのだけど……………

残ったのは血に汚れた自分自身のみ

得るモノはなく、失ったモノの方が多いという虚し過ぎる結末。

その靈力を弾として打ち出す銃を使い、鬼のような表情で狂ったように激しい戦い方することから、敵からは”狂鬼”、仲間からは”狂乱の仁”と言われる存在と成り果てた。

しかし、戦争が終わると彼はまるで憑き物が落ちたかのように軍を

抜けて隠居するように表の世界から退場し、ひっそりと門下生のいない小さな道場を開いている。

そんな彼に……与一に残された最後の血族に僕は永琳が止めるのも聞かず、直接会いに行ってみると

「軍人がいまさらなんの用だ？俺は軍に戻る気は無いぜ？」

どこか達観したような目で僕を見つめる仁の姿があった。

そこで僕は軍関係で来たのではなく、与一の事で頼み事があると伝えると

「……………与一が……………生きてる？……………本当なのか？与一が……………与一が生きてるなんて……………」

仁は目を見開いて驚いていた。

それもそのはず、与一の家族はあの戦争で砲撃を受けて家族全員が死亡している。

そんな中で与一だけが生きていたのはまさに奇跡に近いのだ。

「なあ頼む！与一に……………与一に逢わせてくれ！」

仁は僕の肩を掴んでそう懇願してきた。

そのあまりに必死な様子に驚きながらも僕は頷き、与一をここに呼ぶと

「……………本当に……………与一なん…だな？……………良かった……………生きててくれて」

仁は泣きながら与一を抱きしめてそう言ったのだった。

その後、仁が落ち着いたのを見計らって話を聞いてみると

「俺は……………あの時……………与一の親父さんに助けられた時に、なんのお礼も言わずに軍に入隊したんだ……………お袋と俺を売ったあの裏切り者をこの手で殺そうとそれだけを考えて……………馬鹿だよな？復讐なんて虚しいだけだ……………お袋は二度と戻って来ねえのにな……………散々与一の親父さんにそう言われてのに結局はやつちまったんだ……………」

仁はまるで懺悔するかのように僕にそう言つと静かに空を見上げる。

「戦争が終わつて……………頭の冷えた俺は……………与一の親父さんに改めて礼を言おうとしたんだ……………あんたも分かるように親父さん達はすでにこの世にはいなかった……………礼を言うには遅すぎたんだ……………それだけが……………一番心残りだった」

そして与一を見つめると

「与一の事で頼み事があるんだよな？どんな事でも引き受けるよ……………あの時の礼を親父さんの代わりに与一に受け取ってもらいたいんだ」

穏やかに微笑むのだった。

それから仁は与一の師匠として自分自身が戦場で学んできた技術や知識を全て教えてくれるようになったのだ。

そしてもう一つ変わった事がある。

それは……………

「永伽！これからの与一の修行計画についてなんだが……………一緒に考えてくれないか？」

仁は数枚の書類を手にしながら僕に近寄る。

その距離、互いの額がくつつく僅か数cm

「ふえ！ち、近いよ仁！？／＼／＼」

顔が真っ赤になる僕を見た仁は

「おっと悪りい！つい熱くなっちゃったぜ！」

ニカツといつもの笑顔を浮かべて謝った。

「き、気をつけてね？……………またドキドキするう…………… / / /」

真つ赤になった顔を俯かせながら僕は小さくそう呟く。

「ん？なんか言ったか？」

そんな僕の様子に仁は不思議そうな顔をして覗き込んでくる。

「わひゃあああああ！！」

「おわ！！びつくりした！ど、どうしたんだよいきなり？」

いきなりの仁の最接近に驚いた僕に仁は心配そうに聞いてきた。

「にゃ、にゃんでもないでしゅよ？だだだだ大丈夫でしゅ！ / / /」

それに対して僕はカミカミになりながら答える。

「……………本当に大丈夫なのか？」

とまあこんなやり取りが与一のいない時に何度も起きているのだ。

初めはただ恥ずかしいだけなのかと思っていたんだけど、何度か話していくうちに胸がポカポカしたり、ドキドキしたり、キュンツてきたりして何かの病気を罹ったのかと思っただけけど……どうやら違うらしい。

どうやら僕は……

恋しちゃったみたいなのだ

僕を名家八意家の英雄の八意 永伽としてではなく、ただの永伽として見てくれる彼にどうやら気が付かない内に惹かれてしまったようだようで、最近では仁に会える日が楽しみになってきている。

そんな自分の変化に驚きながら、仁が僕の気持ちに気が付くかどうかワクワクしながら毎日を過ごすこの日常がとても気に入っている僕がいる。

こんな毎日が続けばいいのにと願ってしまうのは仕方がない事だと僕は思う。

多分それこそ仁から求められれば全てを明け渡してしまえるとも思える程に僕は彼の事が好きみたいだ。

自分でも好きな相手に尽くしてしまう性格なのは分かってる。

だから……

早く気が付いてね仁？

………君が僕を求めてくれるのを待ってるから

第16話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

## 第17話（前書き）

完成ッス

それでは第17話始まります。

## 第17話

いきなりですが今僕はかなり驚いています。

「大変です永伽お姉様！」

血相を変えた永琳が台所で夕食を作っていた僕の下へ駆けてきた。

「どうしたの永琳？そんなに慌てて」

そんな永琳の様子に僕は小首を傾げて聞くと

「ブハツ！着物に割烹着姿で首を傾げるお姉様は萌えええええ……  
…じゃなくて！！とにかく大変なんです！」

鼻から忠誠心を噴き出した永琳は一瞬トリップしかけるも、なんとか耐え切って真剣な表情で詰め寄ってくる。

とりあえず鼻をなんとかしてほしいなあ……………

そんな事を考えながら永琳の話を聞く為に夕食作りを中断して身体

ごと永琳に向き直ると

「与一が……………与一が『ジヨウゲンノツキ』と『カゲンノツキ』を持ち出して行方不明になったんです！」

永琳は僕の沸点を素晴らしく刺激するような事を教えてくれた。

「……………それで？」

それは……………自分でも分かるくらいにとっても冷たい口調だった。

「お、お姉…様？」

永琳は突然雰囲気の変わった僕に驚き、圧倒されて若干縮こまる。

「もう人は動してるんだよね？」

僕はゆっくりと着ていた割烹着を脱いで綺麗に畳みながら永琳にそう聞くと

「は、はい……………」

永琳は僅かに身体と声を震わせながら僕の問いに答えた。

「それなら与一の居場所が分かったら教えてね？」

僕はそんな永琳を一人台所に残して自分の部屋に戻る。

部屋に戻った僕は普段着であり、母様の形見でもある着物を脱いで部屋の一番奥にある鍵付きのクローゼットを開く。

「……………またこれを着るなんてね」

そこには反乱戦争時代に僕が愛用していた黒いワンピースに編み上げブーツ、そして……………セフィオスのコートが掛けてあった。

その服に袖を通しながら僕は与一が仁の下で修行する2年前の事を思い出す。

それは……………僕と与一が交わしたある約束。

「与一、少し……………いいかな？」

その日僕は豊姫と依姫の花嫁修行終了後に個人的に行っていた基礎訓練だけで段々と頭角を現し始めた与一を呼び止める。

「なあに？ かあさん」

与一は首を傾げながら僕の方を見た。

そんな与一に僕は

「君はとてもすごい力がある」

そう告げた。

「そうなの？」

そう言われた与一は不思議そうに自分の胸に手を当てる。

「もしかしたら僕よりも強くなるかもしれない」

しかし僕は真剣な表情を崩さずに話を続けた。

「……………んう？」

与一はまだよく理解できていないようでさらに首を傾げる。

「まだよく分からないかもしれないけど……………聞いて？」

そんな与一の肩に手を置いてしゃがみ込んで目線を合わせた。

「……………うん」

僕の真剣な表情に与一は戸惑いながらも頷く。

「……………いつか君は、愛する人を守るかもしれない」

僕は与一に目線を合わせたまま話す。

「……………うん」

与一は僕の言っている事を聞き逃さないように耳を傾け続ける。

「そして与一は危機に陥って死んじゃうかもしれない」

僕はそんな未来が来ない……………穏やかで平和な未来が与一に訪れる事を祈りながら話す。

「……………うん」

ゆっくりと頷く与一。

「でもね与一？……………生きて、生きて、生き続けるんだよ？」

そして僕は先程とは矛盾した事を言う。

「……………うん？」

与一もそこに気が付いたようだが僕の伝えたい真意についてはまだ気がつかない。

「クスツ……………まだ早かったかな？」

僕は少し笑って与一に今できる最高の笑顔を向けた。

「……………ぼく、かーさんをまもる！」

与一は自分なりに少し理解したのか笑顔で僕にそう言ってくる。

「あはは 嬉しいなあ ……でもね」

その言葉が嬉しくて思わず笑ってしまっけど僕はまだ言葉を紡ぐ。

「……………？」

与一はまた不思議そうに首を傾げた。

「与一はまだまだ長生きするから…………… 本当に本当に好きな人を探して…………… その人を、絶対に守り抜いてあげて？」

僕は今できる一番優しい笑みを浮かべて与一にそう話した。

「うん！」

その最後の言葉に与一は元気よく頷いたのだった。

与一との約束を思い出し終わった僕はコートを着込んで部屋を出る。

向かう場所は司令部としての機能を持つ永琳の部屋。

「『ジョウゲンノツキ』、『カゲンノツキ』か……………」

僕は与一の持ち出した物について考える。

『ジョウゲンノツキ』と『カゲンノツキ』は与一専用開発された高性能なレールハンドガンで、霊力から作る弾丸はもちろん実弾やナパーム弾、麻酔弾まで使用できるまさに万能型のハンドガンなの

だ。

(デビ○メイ○ライのエ○ニー&ア○ボリーによく似てる)

しかし、この二丁の銃を与一が手にするのはまだまだ先の事で今現在行われている仁の修行が終わってから渡すつもりだったはずなのだが……

「……………何か厄介事に巻き込まれた？」

僕は与一があこの二丁の銃を持ち出した理由について考える。

恐らく永琳もその原因について調べているはずだ。

それに夕食作りの時間になってもいまだに帰って来ない豊姫と依姫も気になる。

もしかすると今回の与一のこの行動に関係しているのかもしれない。

「……………何かあったら僕達に頼るようにつて言ってるのに……………」

僕はそう呟いてため息を吐きながら目を閉じる。

「何だろうと……………」

そしてゆっくりと目を開きながら今まで眠らせていた力を解き放つ。

「誰だろうと……………」

それは先の戦争での自分を……………」非情なる英雄としての八意 永伽”を揺り起こす為の儀式。

「僕達の幸せを邪魔するなら……………」

急激に冷えていく心を感じながら……………」

「絶望を届けてあげないとね？」

僕はそう呟きこの事件の詳しい情報と与一の居場所を聞き出す為に永琳の部屋の扉を開くのだった。

第17話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見・感想お待ちしております。

## 第18話(前書き)

できた(「。。」)

それでは第18話始まります。

## 第18話

いきなりですが今僕は移動しています。

ブオン！

僕は反乱戦争時に敵から奪い取ったハーディ・デイトナを駆り夜の  
高速道路をフルスロットルで駆け抜ける。

目指すのは与一が目指しているであろう街の外れにある廃棄された  
倉庫街。

そこに監禁された豊姫と依姫がいる。

どうやら与一はその二人を助ける為に『ジョウゲンノツキ』と『カ  
ゲンノツキ』を持ち出したようなのだ。

永琳が集めた情報によると今より約2時間前、学校から帰っていた  
豊姫と依姫はいつも通り明るく可愛い男の娘……ではなく男の子  
で学校でも人気者である与一が出て来るのを校門で待っていた。

するとそこに黒塗りの大型車が二人の前に止まり、ちようど学校を

出て来た与一の前でその中に乗っていた男達によって拉致されてしまったようなのだ。

そしてそれを見ていた与一は慌ててその大型車を追い掛けるも追いつけず、仕方なく前に永琳から作ってもらっていた特殊な周波数でしか探知できない超高性能な小型発信機をくつつける事で二人を見失わないようにした。

そして一度家に戻った与一は自分専用の武器である『ジヨウゲンノツキ』と『カゲンノツキ』を永琳が僕の写真を見てトリップしてる間に持ち出す事に成功、今現在二人を追い掛ける……………

「……………永琳はあとでお仕置きだね」

僕はハーディ・デイトナの運転に集中しながらそう呟く。

とりあえず今は豊姫と依姫の捕まっている廃棄された倉庫街へと道を急ぐべきだ。

そう思いながらも僕は家を出発する前に永琳から聞かされた事を考えていた。

~~~~~

「……………」異能無効化装置”？」

出発前の僕はハーディ・デイトナに跨がりながら今回の事件の重要な情報を永琳から説明を受けていた。

「そうですねお姉様、最近地下に潜っていたとある武器商人が作り出す事に成功したらしいのですが……………もしかしたらこの事件に使われた可能性があります」

永琳は真剣な表情を浮かべたままその装置についての説明を続ける。

「この”異能無効化装置”の性能についてはなのですが……………妖力や魔法、それに能力を使った攻撃を直径10kmの範囲内であれば無効化する事ができるという少々厄介な代物なのです……………あの二人が簡単に捕まったのを考えると恐らくお姉様の力を封じる事も可能という事では……………」

ブオン！

僕は永琳がそこまで言ったところでハーディ・デイトナのエンジンに始動させた。

「永琳？僕がただの人間相手にそこまで苦戦しないよ……………それに僕にも考えがあるからね」

心配そうな表情を浮かべる永琳に僕はそう言うとハーディ・デイト

ナのアクセルを全開まで引いてそのまま豊姫と依姫が捕まっている
であろう倉庫街に向けて出発したのだった。

~~~~~

「……………」 異能無効化装置”か

僕はその性質の説明を永琳から聞いて少し気になっていた。あつた。

”異能無効化装置”の性質は”とある身近な人達”の力によく似ているのだ。

「……………」

しかしそれを口には出さない。

たとえばそれがこの事件のカギなのだとしても……………

ゴウン！

「ッ!?…………敵!?」  
そんな事を考えていたらすでに目的地である倉庫街の入り口近くまで来ていた。

敵はすでに入り口の防御を固めて分厚い金属製の門に設置された何丁もの機銃が僕を狙っている。

「くっ!」

僕が急いでハーデイ・デイトナの進路を変更した瞬間…………

ガガガガガガガガガガガ!

設置された機銃が一斉に火を噴いた。

僕は弾丸を吐き出し続ける機銃の攻撃を避けながら倉庫街へと続く門へともう一度進路を向ける。

機銃からの攻撃はより一層激しくなるが僕は気にせず突き進んだ。

チュイン!

ハーデイ・デイトナのボデイに何発か命中する。

「てやあああああ!」

僕はそんなハーデイ・デイトナを乗り捨てるように門へぶつける。

そして…………

「ファイア！」

ドガン！

ハーデイ・デイトナの燃料タンクを狙いファイアを放つ。

それによってハーデイ・デイトナが爆発を起こして門が吹き飛んだ。

「シッ！」

僕は正宗に霊力を籠めて振るう。

ザン！

その一撃で門の守りを固めていた敵はバラバラに切り裂かれて絶命した。

「……………」

撒き散らされた紅い血液と肉片、そして炎の中で僕はゆっくりと進む。

その先に見えるのは重火器を装備した特殊部隊が見えた。

その中に……………

「……………か……………あ……………さん」

傷付き、ボロボロになった与一の姿が……………

「……………押し通る!」

それを見た僕は正宗を構えて突撃したのだった。

第18話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第19話(前書き)

誤字修正しました。

それでは第19話始まりませす。

## 第19話

いきなりですが今僕は戦っています。

「死ねええええ!!」

僕の背後からそう叫び声をあげて光の剣……ライトセイバーを振りかぶる男。

「……………」

ズバツ!

「かはあ……………」

僕はそんな男を一回転する要領で上下真つ二つ分かれるように切り裂いた。

恐らく男は痛みを感じる間もなく絶命したことだろう。

僕の周りにはそんな風に身体を切り裂かれて絶命した哀れな骸が生きる為に必要な紅く温かな液体と臓物を撒き散らし転がっている。

「……………与一」

その中で僕は放心状態でただこの殺戮の乱舞を見続ける自分の息子の名前を呼ぶ。

放心状態の与一は今見ている出来事は現実に起きている事であると認知出来ていないようだ。

最初に敵陣へと突撃をかけた僕はボロボロになりながらもジョウゲンノツキとカゲンノツキを握り続ける与一を救出したのだが……………

与一は何事もなかったように僕が人を斬る様子を見て固まったのだ。

僕はそんな与一を横目で見ながら語りかけるように話した。

「……………目を逸らさないで」

与一は身体をビクツとさせて僕の方を見る。

青ざめて恐怖に引き攣った表情を浮かべた与一はまるで油の切れた機械のようにゆっくりと僕の方を見た。

それは当然の反応なのだと思う。

「……………シャドウフレア」

ズガン！

黒い球体が会話中の僕達を攻撃しようとした連中を飲み込み消し飛ばした。

眉一つ動かさずにそれを行った僕を見る与一の目には恐怖が宿り始めている。

それを確認しながら僕は与一にさらなる言葉を紡ぐ。

「いい？与一……………これが

”人を殺す”

って事なんだよ？」

与一は目を見開き僕を……………英雄として人を斬る八意 永伽を見つめる。

そして……………

「……………うっ……………うええええええ！！！」

その瞬間、与一は吐いた。

今まで見るはずのなかった”人殺し”の場面を見せ付けられているのだからこうなるのは明白だ。

僕はただその様子を見ながら迫ってくる敵を斬り続ける。

それもわざと斬った断面が与一に見えるように角度を調節しながら  
.....

どうしてこんな事をするのか？

それは与一が僕がここに来るまでに”誰一人として人を殺していない”からだ。

せいぜい脚や腕を撃ち抜いて行動不能に陥らせるのみ.....

これから助ける存在がいるはずなのに与一は”人を殺す覚悟”を持つ事が出来ていなかった。

だがそれは当然の事なのかもしれない。

たかが10歳の子供がそんな覚悟を持ち合わせている方がおかしいのだ。

だから.....

「与一？」

僕の声に再び与一が顔を上げる。

僕は自然に構えを取り……………

「……………霊刃八閃」

ズバンッ！

周りにいる連中を切り裂いた。

そして固まった与一に

「これが……………戦争という異常空間で英雄と祭り上げられた

”大量殺戮者”

の姿だよ……………」

そう言って背を向けた。

僕の後ろで与一は震えている気配が感じられる。

与一はここで潰れてしまいかもしれない……………

でも僕としては与一がこんな薄汚れた世界へと入ってほしくはないからこのままでもいいと思う部分もある。

でも……………

「でもね与一？」

僕は出来るだけ優しい声で与一に呼び掛ける。

「僕は君にここで引いて欲しくないな」

与一は僕の後ろで相変わらず震えている気配を感じながらゆっくりと話し掛けた。

「僕と……………約束したよね？与一はその事を覚えているから二人を助けに来たんだよね？なら……………」

” 今がその時 ”

なんだと思うよ？」

与一の震えている気配が止まった。

僕は与一に背中を見せたまま微笑み……

「大切なものを守るのに殺す必要は無い……そんな事をしなくても守れるものはある……与一……君には僕みたいに復讐だけで人を殺すような存在ではなく」

”大切な人を守れる存在”

になつて欲しいんだ……だから……二人を助けてあげて？」

そう言つて正宗を構える。

そして、その言葉を聞いた瞬間に与一が再び立ち上がるのを感じた。

「……………母さん、僕……………」

与一は必死に何かを伝えようとするけどそれを僕は

「そこから先は帰ってから聞くよ」

そう言つて遮る。

「ここは僕が引き受けるから先に行つてて与一？二人が待ってるよ？ほら早く……！」

僕は与一を叱咤するようにその声をかけた。

「うん！絶対に二人を助けて帰って来る！」

与一は元気よくその声に応えて走り去る。

奴らがそんな与一に銃を向けるけど………

「……………撃たせないよ……………一閃！！」

ズバツ！

僕はそいつらを正宗で切り裂く。

そして

「我が名は八意 永伽！名家八意家の前当主にして先の大戦において英雄と呼ばれし汝らの天敵！この平和を脅かす貴様らに安息ある死が訪れるとは思うな！死にたい者からかかって来い！！」

そんな名乗りを上げつつ敵陣へと突撃を開始したのだった。



## 第19話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

**番外編クリスマススペシャル (前書き)**

これは事件発生前のお話……………

それでは番外編クリスマススペシャルが始まります。

## 番外編クリスマススペシャル

いきなりですが今僕は考えています。

「……………はあ」

ベッドとクローゼット、それに簡易テーブルしかない自室でゆっくりとため息を吐きながら僕は考える。

何故こうなったのだろうか……………

ベッドをに視線を移すと僕を悩ませる”あるモノ”が……………

「はあ……………口は災いの元だね……………」

海よりも深く、山よりも高い後悔をしながらそれに僕は手を伸ばした。

きっかけは僕の前世の記憶からだった。

~~~~~

「……………えっと今日は確か……………12月24日でしたね……………それがどうかしたのですか？」

「ううん、なんでもないよ永琳」

永琳から今日の日付を確認した僕は掠れてほとんど残っていない前世の記憶から今日がクリスマススイヴである事を思い出して少しだけ心が踊った。

もはや前世の自分が男だった事と自分が好きだったゲームの内容以外はぼんやりと霞みがかったかのように思い出せない僕の記憶の中で、一つだけ思い出せた冬の大イベントであるクリスマスはどうしてもやってみたい。

そう思ったのは別に悪い事ではないと思う。

「でも……………問題はどうかやってクリスマスを永琳達に説明するかだよね……………」

永琳と別れた僕はその事に頭を悩ませながら自室へと向かうと

「あれ？永伽様？」

「何か悩まれている様子ですがどうなさったのですか？」

前から豊姫と依姫が何かの雑誌を手に持ちながらこちらに歩いて来た。

「ちよつと考え事があつてね……………それより二人は何を読んでの？」

僕は考えを中断し、笑顔で二人にそう言う……………

「永伽様！？この雑誌知らないんですか！？」

「知らない人を始めて見ました……………」

二人は信じられないものを見たような表情を浮かべ、僕に雑誌を開いて内容を見せ付けながら詰め寄って来た。

「ふえ！？な、なに？そんなに有名なの？」

詰め寄る二人の勢いに押された僕が一步後ずさると

「有名というか……………この雑誌は女の子なら誰でも絶対知ってるって断言できるくらい人気の雑誌なんですよ！？」

「時代の最先端をいく斬新で革新的な技術をふんだんに使った可愛い服から色気が際立つ服まで紹介されている雑誌なんです！」

二人は勢いをそのままにさらに一步前に踏み出した。

「そ、そうなんだ……………それで……………その本の名前は……………何なの？」

「……………ちょっと頭痛くなってきた……………」

僕は頭を押さえながらその雑誌に目を通していくと次のページからはネグリジェ特集で前に与一が着せられていたやつの色違いが……

「……………いつたい永琳はなにがしたいんだろう」

僕はそう呟き半ば魂が抜けそうになりながらもさらにページを進めると

「ん？こ、これって……………」

そのめくった次のページの端っこの方に僕は視線が外せなくなった。

「ん？永伽様？……………ああその服……………」

「その赤い服は恐らく冬のパーティー用ドレスだと思われませんが……その帽子がよく分からないのです」

急にページをめくる手を止めた僕が気になったのか豊姫と依姫は僕の左右に回り込みそのページを見つめて僕に説明する。

しかし二人の説明は僕の耳には入らなかった。

何故なら今の僕にとってその服はとても懐かしい物だったからだ。

「……………サンタ服だ……………」

僕は思わず呟く。

「「え？」」

その呟きは二人に聞こえていたようだがそんなの関係ない。

女の子用になっており、スカートの丈がかなり短いように感じるけど確かにこの服はサンタ服だ……………いや、ミニスカサンタだ。

「これ……………欲しいなあ……………」

せっかく見つけたのだから実際に見てみたいと思いが思わず口から漏れてしまったのは自分でも無意識だった。

だからだろう……………

後ろから近づいてくる存在に気が付かなかったのは……………

「……………あら永伽お姉様？その服を着たいのですか？」

「え？」

そんな声に振り返ると……………そこにはとっても素敵な笑顔を浮かべ、鼻から真っ赤な忠誠心を垂れ流した永琳がああ雑誌……………HELSOを添えて持っていた。

「さあお姉様 お着替えくださいませ」

永琳は妙な威圧感とともに僕にそのミニスカサント服+白ニーソを手渡してくる。

……………恐らく拒否権は無いのだろう。

「あ、ありがとう……………永琳……………」

僕は頬がヒクつくのを感じながらそのミニスカサント服+白ニーソを受け取り、自室へと重い足どりで向かったのだった。

そして現在に至る

~~~~~

「……………着るしか……………無いよ……………ね？」

僕は手に取ったミニスカサンタ服を見つめながらそう呟く。

誰もいない自室の中でその呟きは誰に聞かれることもなく小さく消えていった。

「うううううう……………／／／」

顔が赤くなり熱を帯びてくるのを感じる。

なんせ今まで僕は短いミニスカートなんてあまり着ようとはあまり思わなかったから、どうしても恥ずかしさが込み上げてくるのだ。

確かに元男としての恥ずかしさつてのもあるけど今では好きな異性ができるくらいに心が女の子になってしまっはいる。

それにミニスカートを着てみたいという気持ちもある。

……………でも恥ずかしくて着られない。

ただどあの妙に威圧感のある永琳を裏切るような真似は……………絶対にしたくない。

絶対後でなにかされるに決まってる……………

だったら……………

「答えは一つ……………女は……………度胸……………だよな？」

そんな呟きを残しながら僕は自分の身につけていた普段着の着物を

脱ぐのだった。

~~~~~

「とてもお似合いですよ永伽お姉様 ……ええと・て・も フフ
フフフ」

ミニスカサンタ服+白ニーソに着替え、ついでに髪をツイントール
にした僕が初めに会ったのは忠誠心ダラダラな永琳だった。

「そ、そうかな？」

僕はそんな永琳の姿を見てドン引きするけど永琳は気にしていない
ようだ。

「ささ、お姉様 みんな待ってますよ？」

永琳はそう言っ僕を普段は使わない地下の大広間へと誘う。

「”みんな”？」

僕はその永琳の”みんな”という言葉に首を捻りながらついて行くと

「わぁ〜！凄く似合ってますよ？」

「凄い……………こんな風になるなんて……………」

そこには普段着から青色のドレスに着替えた豊姫と赤色のドレスに着替えた依姫と……………

「これ似合ってるかな母さん？」

茶色のミニスカートに指先しか出せないくらいに大きいトナカイの角のあるフードの付いたをパーカーを着た与一が上目づかいに僕に近寄ってきた。

「……………似合ってるよ与一……………そういう趣味のハンターさんに狙われそうなくらいだね……………」

ついそんな感想が出たのは仕方のない事だと思う。

後ろで永琳と豊姫と依姫の鼻息が荒いように感じるのは気のせいじゃないと思うし……………

「んっ」

こっちを見ながら首を傾げる与一は与一で理解できてないみたいだし……………

「どっしりおっ……………今回は流石にまずいかも……………」

主に僕と与一の貞操が……………

「あ、母さん！僕ケーキ取ってくる」

「あ、与一！」

そんな僕の考えをよそに与一は恐らくパーティー用に豊姫と依姫が作ったケーキを取りに……………あ、転んだ。

「うえ〜ん！ケーキ落としちゃったあ〜！」

「うわあ……………」

何故僕がこんな声を出したのか？

それにはちゃんと訳がある。

だって僕の視線の先には白い生クリームがたっぷりとかかり、ミニスカートから僅かに水色の縞パンが見えるトナカイな与一の姿が…

……………

「ゴクリッ！」

そんな喉の鳴る音が僕の両隣から聞こえてきた。

明らかに捕食者が獲物を見つけた音だ。

「頂きま〜す！」

番外編クリスマススペシャル (後書き)

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第20話(前書き)

短いよ………

それでは第20話始まります。

第20話

いきなりですが今僕は命を奪っています。

「たあっ!!」

ザシュツ!!

気合いの裂帛とともにまた一人ただの肉塊へと変わる。

「……………霊刃八閃!」

ズバンツ!!

さらに霊力を纏わせた広範囲攻撃の霊刃八閃でまた多くの命を刈り取った。

もはや何百人……………いや、何千人の命を奪ったかすら分からないくらいに僕の周りには命を散らした肉塊が散乱している。

「……………ふう」

僕は正宗の構えを解いてまだまだ減る事のない敵を睨みながら一息つくつと奴らは……………

ガシヤ！

一斉に手に持った銃器を構えて僕に向かって照準してきた。

だけど……………

「撃たせる暇は与えないよ？……………フレア」

ドガン！

今度は焼け焦げ、嫌な匂いをさせたバラバラの肉塊が出来上がった。

「……………」

僕は無言でその光景を見つめて……………

「次はあなた達の番だよ？」

いまだに減る様子のない敵にそう告げた。

しかし……………

奴らはそれに動じる様子はなく、ただ銃器を構えて僕を狙うのみ。

「ん？……………変だね……………」

そんな彼らを見ながら僕はまた正宗を構える。

嫌な予感がした。

最初の方こそ声を出して戦う者達がいたが、今では何度も何度も相手が恐怖に震えるような場面を作り出しているのに動じる様子が全くない銃器を構える兵士達しかいない……………

しかもその兵士達はどこか見覚えがあつて……………

「……………一目のようなフルフェイスのヘルメットに青く輝くライソンの入ったボディスーツ……………いったいどこで……………」

相変わらず機械のように襲い掛かってくる彼らに容赦する事なくただ斬り伏せながら僕は考える。

装備は違えど基本的にあのフルフェイスのヘルメットとボディスーツを着ていることは変わらないその兵士達はどこかで見た感じがするのだ。

「……………前の戦争にはいなかった……………じゃあ……………」

どこで？

そんな考えを思い浮かべながら僕はただ敵を斬り伏せる。

「……………」今の僕”じゃないとすると……………前世……………？」

僕は必死にその兵士達の事を思い出そうと前世の消えかかった記憶を掘り起こしていく……………

そして……

「……………ッ!?……………まさか……………」

僕はある答えに辿り着く。

それはこの身体の元となった人物の登場する世界において、一部の人間を除き誰もその存在を知らなかったアンダーグラウンド（地下世界）の兵士……………

「……………」 ディープグラウンド…………… ソルジャー……………」

僕は今自分で言った言葉が信じられなかった。

何故ならディープグラウンドソルジャーはファイナルファンタジー?の世界において、人をどれだけ強く出来るのかという人道や倫理を全く考えずコストも度外視して強化した結果作り出された存在なので、もしそんな莫大な経費がかかる大規模な事をすれば必ず僕や永琳の情報網に引っ掛かり攻撃対象となっていたはずなのである。

しかし、今現在僕はそのありえない存在であるディープグラウンドソルジャーに囲まれているのだ。

これで混乱しない方がおかしい。

「どっして……………」

思わず口に出してしまった僕は油断なく周りを固めるディープレウインドソルジャー達を睨んで他に何か分かる事がないか探した。

もしかしたらただ同じ格好をしているだけなのでは？

そう思って気配を探るがそのような気配は感じられず、逆に良く訓練された兵士としての気配のみ伝わってくる。

そして、自分を囲んでいるのがディープレウインドソルジャーである事以外何も掴めるものはない。

「……………くっ」

とてもではないが情報が足りなかった。

何故彼らがこの場にいるのか……………

僕はそれが知りたかった……………

しかし……………

「うぐっ！？こ、これ……………っ……………」

不意に何かに自分の中にある力を拘束される感覚に襲われた。

でもその正体について僕は分かってる。

「異能無効化装置……………使ったんだね……………」

それはまさに駄目押しだった。

兵士達の正体に気が付き、動きを止めた僕に異能無効化装置を使って魔法を使えなくさせる……………

”普通”に考えてそれはまさに詰みの状況。

この状況で今の僕に物量で攻めたら”普通”に考えて負けるのは目に見えている。

だからだろう……………

「……………お久しぶりでございますな永伽様？」

”その人物”はディーブグラウンドソルジャー達が譲った道歩いてこちらに近づきそう言った。

「あなたは……………」

僕は”その人物”を睨みながら正宗を構える。

「ふふふ……………この時をどれほど夢見た事でしょうか？」

そんな僕を寒気がするような視線で嘗め回すかのように見た”その人物”は満足げに頷いてそう言う。

僕はそんな風に僕を見つめる”その人物”を睨んだまま

「……………見つけた……………最後の一人……………」叔父様”」

正宗の切っ先を向けてそう呟いたのだった。

第20話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見・感想お待ちしております。

第21話(前書き)

明けましておめでとーいーねーますm(ー)m

今年もよろしくお願いします) (

それでは第21話始まります。

第21話

いきなりですが僕は叔父が……………嫌いです。

叔父との出会いは今から16年前に遡ることになる。

「やあ永伽、会えて嬉しいよ」

それは僕の父様の弟で科学者としては優秀だけど濁った目をした叔父様が天才、神童と呼ばれた永琳に会うためわざわざ仕事を休んで家にやって来た時だった。

「……………こんにちは」

永琳に会った後なのだろう僕を見詰める顔には、出してはいなかったけど落胆したような気配が感じられる。

この時の永琳はまだ周りの人を信用していなかったので恐らくは話しかけようとして相手にされなかった可能性が一番高い。

そんな叔父に僕は一礼して道を譲った。

すると叔父は歩みを止め

「……………」

何も言わずにじっと僕の見詰めてきた。

「あ、あの……………」

僕はそんな叔父に声をかけると

「……………ふむ」

叔父は何かに納得したように頷いてそのまま去って行った。

「……………えっと…何だったんだろう」

そんな叔父の行動に首を傾げながらそう呟く僕を残して時は過ぎていくのだった……………

……………今思えばそれが始まりだったんだと思う。

それ以降、叔父は家に来て僕の事を見詰めるようになった。

しかもその視線は年を追う事に粘っこさを増していき、14歳を過ぎて身体が女の子らしくなってきた頃にはどこか寒気といやらしさを混ぜたような視線を向けてくるようになってきたのだ。

何もされなかった為に放置していたけど、その視線のあまりの気持ち悪さに叔父のことが苦手になった。

しかし叔父はそんな僕の反応に何かを感じたのかさらにその視線を強め、それに嫌悪感を感じた僕はさらに叔父の事が苦手になる……

そんなイタチゴッコにも似たやり取りがいつまでも続くかと思われたある日……

「もう大丈夫ですよ永伽お姉様！もうあの男がお姉様を煩わせる事はありません！」

16歳になった頃に永琳からのそんな言葉を聞いた僕は安堵した。

どうやったのかは分からなかったけど永琳は叔父が僕達の近くにいないように策を仕掛けたらしいのだ。

でもそのおかげで僕は安心して日々の暮らしを感受することができたので僕はそれを良しとしていたのだけど……

その考えは甘かった……

叔父が……僕達を裏切ったのだ。

それがあの……僕達の両親を襲撃した事件のきっかけだった。

あの事件には叔父が流した情報……僕達が家にいないという情報を流した為に僕達の両親は殺され、あの戦争が始まったと言っても

過言ではない。

そんな裏切り者の叔父を僕や永琳が許すはずもなく、総力を上げて探し続けたが………発見はおろかその情報すら手に入れることは出来なかった………

戦争が激しくなるにつれて中枢を担っていた僕達八意一族や血の繋がりのある人達が僕達を残して全滅してこちらの陣営が混乱し、叔父の事についての情報は手に入れる事は難しくなった為に諦めるしかなかったのだが………

今………そんな行方不明だった叔父が目の前にいる………

「………僕も………逢いたかったですよ………叔父様」

僕はあの時から変わらず濁った目をした叔父を睨みながら正宗を構えた。

「ふふふ………そう言ってもらえると嬉しいものだねえ………八意家前当主の永伽様？」

叔父は本当に嬉しそうな笑顔を僕に見せながらふざけたような口調でそう言ってくる。

そんな神経を逆なでされるような発言に熱くなりそうな心を抑え、僕は叔父を睨み続けた。

「おお、怖い怖い……流石あの反乱戦争の英雄という事だけはあるねえ……くくく」

しかし叔父は動じた様子もなく、そのおどけたような口調をやめようとはしない。

そんな叔父の様子を見ていた僕にはもう限界だった。

「……………死ね」

そんな言葉を自分でも無意識に出して僕は一瞬で叔父の前まで移動する。

「ッ!？」

叔父は僕の接近に気が付いたがもう遅い。

何故異能を封じられたはずの僕にこんな事が出来るのか？

それは僕の体自体がすでにセフィオスとなっている為に鍛える前から身体能力や反射神経などはあの伝説のソルジャーのものと同等なので元からあるものである身体能力などは封じられる事はなかったからだ。

それにその身体を持った状態で常に鍛練を積み重ね、あの反乱戦争

で戦い続けた結果……さらに身体能力などを底上げする事に成功した。

故に僕は魔力などに頼ることなくあのセフィオスのような圧倒的な戦いに行えるのだ。

「……………」

ビュン！

僕は何も言わずに正宗を振り下ろす。

それは……………もはや回避は不可能な状態のはずだった……………

ガキンツ！！

「なっ！？」

しかし完全に当たると思えた僕の攻撃は防がれ弾かれた。

僕の攻撃を防いだのは叔父の前に立つ大きな黒い片刃の剣を構えた一人の僕と同じくらいの身長少女

その頭には顔の半分を隠す仮面と腰まである白銀の髪に豊満な胸と引き締まった身体にあのディーグラウンドソルジャーと同じボディスーツを身に纏っているのが特徴的だ。

「ふふふ……助かったよ」

叔父は笑顔を浮かべながらその少女の頭を撫でる。

しかしその少女は撫でられた事に全く反応する事なく剣を肩に担いで佇むのみ。

「ふむ……やはり感情はないか……だが壁くらいにはなるだろう」

叔父は顎に手を当てて考え込み、そんな呟きを零すと少女は剣を足を肩幅より少し広く開き、腰を落とした状態で剣を構えた。

そして叔父は

「その”人形”がしばらく相手をしてくれるから遊んでいるといい……」

そう言つて周りに控えていたディーブグラウンドソルジャー達ともにも下がって行く……

それを阻止する為に僕は叔父の方を見るが

「待て！……くう！？」

ガキンツ！

視線を外した瞬間に少女が僕に切り掛かってきた。

第21話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第22話（前書き）

今回から少しずつ鬱展開に……

それでは第22話が始まります。

第22話

いきなりですが今僕は戦っています。

「はっ！！」

「……………」

ガキンツ！

何度も何度も立ち位置を変えて刃を交える僕と白銀の髪の少女。

その戦いによって周りにあつた複数の倉庫はすでに瓦礫や廃墟に変わっている。

それは僕達の魔力や能力を使わずに戦った結果であり、それだけ激しい戦いが繰り広げたという証だ。

「はあ！！」

「ッ！？」

キンツキンツガッ!!

僕は少女に接近して正宗を斜めに切り下ろしそのまま横に薙ぎ払い、
鍔ぜり合いに持ち込む。

その状態で肩をぶつけ合い少女の様子を見ると

「はぁ……はぁ……はぁ……」

仮面で顔を隠した少女は荒い息を吐き、肩で息を吐き明らかに
疲労している。

対する僕は息を切らしてすらない。

そして油断することなく鍔ぜり合いを続けて少女を睨みつけた。

しかし少女はすでにフラフラで鍔ぜり合いで押し込まれないように
力を込めるのに必死になっている。

「しっ!」

ドン!

「あぐっ……」

僕は鍔ぜり合いになっているのを利用して正宗から右手を離して少
女の腹部を殴りつけた。

ドガン!

『その人形は時間は十分に稼いだよ……………そのおかげで面白いものが見れて私は大満足なんだが……………見せてあげよう』

叔父は相変わらず僕を馬鹿にしたような口調でそう言ってもう一つなにもない空間にモニターを呼び出して”ある映像”を見せてきた。

「なっ!?!」

そこに映っていたのは……………

『……………豊姫! 依姫! もう……………もうやめてよ! 目を覚まして!』

……………
最初に会った時よりボロボロになり、悲しみに顔を歪ませる写と

『……………』

どこか虚ろな目で自身の武器を構える豊姫と依姫の姿だった。

「これは……………いつたい……………」

ありえない状況に構えを解いてモニターを食い入るように見詰める僕に

『永伽……………のんびりしていて良いのかな?』

叔父はそう声をかけた。

ビュンッ!

「ッ!?!」

モニターを見詰めていた僕に向けて振り下ろされた大剣を寸前で回避し、正宗を構え直す。

そこには血を流し、全身ボロボロになりながらも剣を構える少女の姿があった。

『ほらほら永伽……………早く倒さないと君の息子が大切な人達に殺されてしまうよ?』

「くう……………」

そんな分かりきった事をあえて言う叔父に苛立ちを感じながら僕は早く勝負を決める為に自分の持っている手札を一つ使うことを決め、少女に向かって……………

「あなたに恨みは無いけれど……………立ちはだかるなら容赦はしない！……………」八刀一閃”！！！”

八刀一閃を放ったのだった。

「ッ！？」

ズバンツ！

少女は剣で八刀一閃を受け止めようとしたが間に合わず全身に斬撃を浴びて仰向けに崩れ落ちる。

それを見ながら僕は正宗を振って血を払い、構えを解くのだった。

何故八刀一閃が使えたのか？

それは八刀一閃自体がただの斬撃による攻撃だからであるからである。

もっと詳しく説明すれば八刀一閃や一閃などの正宗を使う攻撃自体は元々正宗を凄まじい速さで振るう事で一撃で8回切り付けたように見せる技であり、僕が魔力や霊力を使うのはその斬撃を広範囲に広げる為なので異能無効化装置では無効化されることはないのだ。

「これで終わりだね……………」

僕は叔父の映るモニターに背を向けて与一の進んだ道へと進もうとして

『待ちたまえ永伽……あの人形に勝ったご褒美をあげようじゃないか』

そんな叔父の言葉が僕の歩みを止めた。

僕は振り返りながらそのモニターを叩き斬ろうと正宗を振るい……

『君が斬ったあの人形……素顔は見たかい？』

寸前で止まった。

それを見た叔父は

『その様子ならまだ見てないみたいだね？ちゃんと見ておくといい……くくく』

顔を醜く歪ませて笑う。

そんな叔父の様子に不審に思った僕は倒れて動かない少女に近寄って……

元の黒色から白銀の髪と青色の瞳に変わり、僕の斬撃により絶命した母様を見詰めるのだった。

第22話（後書き）

いかがだったでしょうか？

皆様のご意見・感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2688v/>

この転生はないだろ…。～幻想郷の絶対強者となるまで～リペア

2012年1月8日01時45分発行